平成 28 年度

研　究　集　録

秋田県立大曲農業高等学校

「資質能力（力量）の向上は、すべての教員に課された責務である」

校長　伊東　金一

”増える校務分掌（教育業務）と求められる研修”

我が国の少子化は教育活動を実践する上で大きな影響を及ぼしている。国から県への教員定数は、基本的に生徒数によって決まると言われている。そのため、歯止めなく少子化へと進む本県などの場合、毎年生徒数が減少しており国からの教員定数は毎年減らされていると聞いている。結果的に、県から学校への教員定数はその流れで減少することとなり、学校現場には誠に大きな影響を与えている。各種の教育活動は、小規模校でも、大規模校でも行わなければならない種類と内容に大きな違いはなく、違いがあるのはボリュームの面だけであると言える。

こうした中で各教員は、校長の掲げる重点目標の達成に向けて、校内外の各種教育業務を分担（校務分掌）しながら生徒の指導に当たっているのである。業務の遂行においては、効率的に、正確に、しかもスピード感を持って行うことが求められる。また、年々校内外の教育業務が増えており、生徒への指導や保護者等への対応には多大な時間を要しているのが偽りのない現実でもある。

このため、教員一人あたりの業務量は年々増すばかりである。しかも、多様な生徒の増加により、今まで以上に「専門的な知識や技能」などの確かな指導力を身に付けなければ、有効適切な指導が十分できずに、うまく対応できないことになるのである。

このように、増える業務と限られた時間のなかで、どのようにして求められる研修を効果的に進め、研修の成果を多くの教員が共有できるのだろうか。

”校内研修の充実を図ることの大切さ　”

多くの教員にとって、今日的な課題について対応すべき研修内容は概ね共通している。個人によって多少の違いこそあれ、最大公約数とも言える、こうした内容が校内研修として取り上げられると効果的である。本集録を読んでいただければご理解いただけると思うが、本年度は「ハイパー QU 研修」「ファシリテーション講習会」などが有意義に計画実施された。「ハイパー QU 研修」は、生徒一人ひとりに居心地の良いクラスにするためのアンケートを実施して、生徒のタイプを４つに分けて教員が理解する手法に関する研修である。これによって、所属するクラスや学年の生徒一人ひとりの状況を適切に把握して、改善に向けた、次の指導へつなげることが可能となるのである。特に、今までは表面的には分からなかった、クラス内の支援を必要とする生徒（要支援生徒）を明確に把握できたのは良かったと思う。このように普段の生徒の姿からは把握できない知見が得られたのである。

次の「ファシリテーション講習会」では、会議や授業などの集団活動が円滑に進むように、また成果が上がるように支援する方法を学ぶことができた。講師の平元美沙緒氏によれば、そのためには７つのこつがあることを分かりやすく実践的に教えていただいた。多くの教員が毎日実践する、「普段の授業」においても有効に活用できることを学んだのは大きな研修の成果だったと思う。

”職員会議で、研修内容のエキスを報告する　”

多忙化のなかで、限られた時間は有効に使いたい。そのため、職員会議自体１時間以内で終了できるよう効果的に運営したい。そして、総合教育センター等での各経験者研修や、自主研修の成果（エキス部分のみで良い）を、必要に応じて資料を準備してもらい職員会議で数分で報告してもらうのである。この取り組みは、本校でもすでに実践中であるが、数分間の報告の在り方を十分精査検討して効果的に実施できるよう、研修部が主導してほしいと思う。今年度は、文部科学省事業の「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（ＳＰＨ)」の指定を受け、1 年目としての取組が多数行われた。直接生徒に関係した研修内容から、教員に関係した研修内容まで幅広く実施された。こうした有意義な研修内容も全職員で共有したいと考えている。

最後に、教師は生徒の教育のために存在している。生徒への指導が適切に、効果的に実践できるようになるための研修は、全ての教師にとって重い責務でもあることを、深く心に刻みたいものである。

平成２８年度　研究集録目次

【巻頭言】「資質能力（力量）の向上は、すべての教員に課された責務である」
・・・・・・・・・・・・・・校　長　　伊　東　金　一・・1

目　　次　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

【校内授業研究】
（１）地理歴史科研究授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　佐々木　　　梢・・・ 3 ～ 5
（２）理科研究授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　加　納　綾　子・・・ 6 ～ 8
（３）校内互見授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　研　　修　　部・・・ 9 ～ 10

【校内研修会】
（１）hyper － QU に関する研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・　湯　澤　美千代・・・11
（２）ファシリテーション講習会・・・・・・・・・・・・・・・・・・　高　川　健　悟・・・12
（３）PTA 研修会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　菅　原　久美子・・・13 ～ 16

【経験年次別研修会】
（１）教職５年経験者研修を終えて・・・・・・・・・・・・・・・・・　佐々木　由貴子・・・17
高　川　健　悟・・・18 ～ 19
（２）教職１０年経験者研修を振り返って・・・・・・・・・・・・・・　平　塚　祥　広・・・20 ～ 21

【校外研修】
（１）全国農業高等学校長協会運営等研究協議会・・・・・・・・・・　大　沼　克　彦・・・22 ～ 31
（２）東北地区高等学校農業教育研究大会・・・・・・・・・・・・・・　藤　井　　　亨・・・32 ～ 34
（３）東北地区高等学校進路指導協議会研究大会岩手大会・・・・・　藤　井　　　亨・・・35 ～ 37

【実践報告】
（１）学年部
・１年部の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　石　垣　ルリ子・・・38 ～ 40
・２年部の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　古　瀬　利　彦・・・41 ～ 42
・３年部の取り組みについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　高　橋　寿　宏・・・43

（２）フラワーアレンジメントコンテスト・・・・・・・・・・・・・・　照　井　豊　和・・・44 ～ 46

（３）日本学校農業クラブ東北連盟大会意見発表会に参加して・・　伊　藤　寿　人・・・47 ～ 53

（４）日本農業クラブ全国大会（大阪大会）に参加して・・・・・　照　井　豊　和・・・54 ～ 57

（５）部活動
・インターハイ・国体を終えて（自転車競技部）・・・・・・・・　藤　井　　　亨・・・58
・全国の壁（柔道部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　石　戸　将　太・・・59
・本州最南端を目指して（女子ハンドボール部）・・・・・・・・　山　本　　　力・・・60
・中国総体を終えて（相撲部）・・・・・・・・・・・・・・・・・・　小　林　和　成・・・61
・インターハイ・国体を終えて（なぎなた部）・・・・・・・・・　古　瀬　利　彦・・・62
・全国高等学校総合文化祭広島大会写真部門を終えて（写真）・・　古　戸　　　毅・・・63 ～ 64

平成２８年度教育委員会指導主事訪問
研究授業研修会記録（地歴公民）

１　日　程

・平成２８年９月２８日（水）１３：３０～１４：２０（５校時）
・３年Ａ組（３５名）（農業科学科）　３年Ａ組教室にて実施
・授業者　佐々木梢　　司会　千葉裕子　　記録　加藤雅隆

２　研修会参加者

勝又貞臣指導主事、千葉裕子、古戸毅、川越英伸、髙橋寿徳、佐藤香、髙橋寿宏
山本力、高橋華子、石戸将太、加藤雅隆、田口健一、髙階市太郎、佐々木彩子
河村祐太郎、進藤純雄

３　授業者からの報告（佐々木　梢）

「自由民権運動」は、視点によって大学入試センター試験レベルから地元の事象まで幅が広く、全体の時間数も限られるため扱いが難しいものであった。今回は地元という要素をグループ活動と合わせることで、生徒に主体的に考えるように促した。また生徒の実力差という不確定要素もあったが、他のクラスの反省も踏まえて積極的に行ってみた。後半部分にしわ寄せがあり残念だったが、生徒の頑張りで全体としてスムーズに進めることができ、学習指導案（別紙記載）の５（４）「授業を行うことにより目指す生徒の姿」に少しでも近づくことができたと考えている。

４　参加者からの感想（ワークショップより）

	良かったこと	改善を要すること
導入のこと	・本時（今日）の流れ全体がわかりやすい。 ・指示や表現が明確である。 ・視聴覚教材を有効に活用している。	・短くできるのではないか。
展開のこと	・グループ活動への移行がスムーズ。 ・全国的な出来事と地元という視点がリンクしていた。 ・生徒の実態に合わせたヒントや引き出しが良かった。 ・思考力、判断力、表現力をつける工夫が見られる学習プリントである。 ・明るい声かけがあり、授業の雰囲気が良かった。	・資料の良さをもっと生かせるのではないか。 ・伝達の時間確保が必要なのではないか。 ・本時の目標にある「文章化させる」の着地点(具体性)が必要なのではないか。 ・「なぜ･･･？」に対して「･･･だから」という基本が必要ではないか。
整理のこと	・地元の偉人（榊田清兵衛）の扱いが良かった。 ・生徒のノートや学習プリントを画像化（タブレット撮影）で共有したことが良かった。	・文章化することが、難しい生徒もいたようだ。

５　指導助言　勝又貞臣指導主事より

取り扱い難い単元であったが、専門的な用語や語句に頼り過ぎずに生徒の動きや発言を引き出しながら「共働・共同」の場面をつかって学び合う様子があり良かった。また地元という視点を取り入れたことで生徒が思考を掘り下げることにもつながったのではないか。
更なる工夫としては「改正公職選挙法での選挙権年齢 18 歳以上への引き下げ」や「主権者教育」など時事的な事柄との関連も出来たのではないか。
教師は「コーディネーター」「プロデューサー」「ファシリテーター」「プロフェッサー」など様々な顔をもつ存在であるが「ティーチャー」として生徒について「どのような力がついたか？」「どのように評価したか？」などを踏まえて「学ぶ喜びを伝える存在」であってほしい。それはまた「大曲農業高校で学ぶ意義」でもあり、今回の内容において地元の偉人である「榊田清兵衛（さかきだ せいべえ)」と関連づけたことは良かったが、その関連を「田沢湖線」の開通や「秋田新幹線こまち」など現在の事象にも発展させることができたのではないかと考えられる。

地理歴史科（日本史Ａ）学習指導案

実 施 日 時　平成２８年９月２８日（水）６校時
対 象 ク ラ ス　農 業 科 学 科 ３ 年 Ａ 組
場　　所　農 業 科 学 科 ３ 年 Ａ 組
使 用 教 科 書　高等学校日本史Ａ（第一学習社）
指　導　者　佐 々 木　梢

１　単元名　　第３節　近代国家の確立

２　単元の目標

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
近代国家成立期の歴史的事象に対する関心を高め、その背景やねらい、問題点などについて考えようとしている。	近代化政策や自由民権運動、大日本帝国憲法制定などについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	史料や統計などの資料から有用な情報を適切に選択し、内容をまとめている。	近代化政策の背景やねらい、問題点などについて理解し、その知識を身に付けている。

３　単元と生徒

本単元は明治新政府による近代化政策の実施から自由民権運動を経て、大日本帝国憲法の制定により立憲国家が成立する過程を扱う。前時代や現代と比較した変化や関連性を理解させるとともに、世界史的視点も取り入れながら諸政策の背景やねらい、問題点について多面的・多角的に考察させたい。

日本史Aは３年生全員が履修する数少ない普通科目の一つである。３年A組の生徒は中学校段階の基礎知識が定着していない生徒が多いが、好奇心が旺盛で、積極的に発言する生徒が多く、資料の読み取りや課題にも積極的に取り組む。一方で複数の意見や視点で考察した内容を統合することを苦手としている生徒が多いので、思考過程に工夫を加えることで生徒の言語能力を高めたい。

４　単元の指導と評価の計画（全９時間）　評価方法（　　）

次	時	指導内容	具体的な評価規準			
			A 関心・意欲・態度	B 思考・判断・表現	C 資料活用の技能	D 知識・理解
1	1・2	近代的軍制の成立	積極的に発問に取り組み、意欲的に探究しようとしている。［観察］		資料や映像から徴兵制の導入による農民や士族への影響を読み取り、まとめることができる。［プリント］	徴兵制が導入された目的について、正しく理解している。［プリント・ノート］
	3・4	地租改正と殖産興業文明開化	積極的に発問に取り組み、意欲的に探究しようとしている。［観察］	地租改正が行われた理由を適切に表現することができる。［プリント・ノート］		欧米文化の流入が人々の生活に与えた影響を正しく理解している。［プリント］
	5	明治初期の外交政策		明治初期の外交政策と現代の外交問題の関わりについて考察し、表現することができる。［ノート］		日本の対欧米外交と対アジア外交の違いを正しく理解している。［ノート］
	6 **本時**	政府への抵抗		読み取った情報をもとに、自由民権運動が拡大した理由を多面的に考察し、表現することができる。［プリント・ノート］	教科書や資料から必要な情報を読み取り、まとめることができる。［プリント・ノート］	

	7	政党の結成 松方財政と 自由民権運動			教科書や資料から自由民権運動が激化した背景を読み取り、まとめることができる。 ［ノート］	国会開設の期限が定められ、伊藤博文が政治の実権を握った理由を正しく理解している。 ［プリント］
	8 ・ 9	大日本帝国憲法 の制定 初期議会		ドイツ憲法をモデルに大日本帝国憲法を作成した理由を多面的・多角的に考察し、表現することができる。 ［ノート］	教科書や資料から必要な情報を読み取り、大日本帝国憲法の特色をまとめることができる。 ［プリント］	大日本帝国憲法の特色を正しく理解している。 ［ノート］

5　本時の計画

（1）題材名　　政府への抵抗

（2）ねらい

①複数の資料の内容を統合し、協力して文章化し表現することができる。

②教科書上の歴史事象を身近に感じさせるとともに、郷土の歴史に対する関心を高めることができる。

（3）展開

評価の観点：　（A）関心・意欲・態度　（B）思考・判断・表現　（C）資料活用の技能　（D）知識・理解

段階	学　習　活　動	指導上の留意点	評　価
導入 （１０分）	・既習事項を確認するとともに、武力抵抗が挫折し、言論による反政府運動が主流になっていったことを理解する。	・確認事項を絞り込むとともに、パワーポイントも活用し、簡潔に説明する。	
本時の目標　　自由民権運動が全国的運動に拡大した理由を二つ以上の視点を取り入れて文章化する。			
	・本時の活動の手順を確認する。 グループをつくり、担当する資料を決める。	・３人（または４人）の班を作らせ、担当する資料を決めさせる。	
展開１ （１０分）	主たる発問　　なぜ秋田でも運動が展開されたのか。 ・自分が担当する資料について必要な情報を読み取り、説明しやすいように簡潔にまとめる。	・読み取りが苦手な生徒に対しては適宜助言を与える。	担当する資料について必要な情報を読み取り、まとめることができる。（C） ［机間指導・プリント］
展開２ （２０分）	・各資料から読み取った内容を班で共有し、その内容を基にして協力して文章化する。	・複数の資料を組みあわせて文章化するように指導する。	協力して文章化することができる。 （B） ［机間指導・プリント］
整理 （１０分）	・発表する。 ・本時の内容をまとめる。	・発表者には大きな声でゆっくり発表するように指導する。	

（4）授業を行うことにより目指す生徒の姿

①協働的な学習を通して多面的に歴史事象を考察し、グループで協力して課題を解決できるようになる。

②地域の歴史に関心を持つとともに、地域的な視点から歴史事象を捉えることができるようになる。

6　協議の視点

生徒の主体的な活動をうながすために、指導者はどのように関わるべきか。（関わり方、程度）

言語活動において、多様な生徒の実態に対応するために、どんな工夫ができるか。（課題設定の仕方、グループの作り方など）

理科（化学基礎）学習指導案

実施日時　平成２８年９月２８日（水）６校時
対　　象　生活科学科１年Ｈ組（３５名）
場　　所　物理地学実験室
使用教科書　新編化学基礎（東京書籍）
指 導 者　加 納 綾 子

1　単元名　　分子と共有結合

2　単元の目標

・模型を用いて、試行錯誤しながら共有結合をつくり出すことができる。・・・・本時
・原子や分子を電子式で表すことができる。・・・・本時
・電子式をもとに、構造式を書くことができる。
・構造式をもとに、分子模型を使って、分子の形を表すことができる。
・身近にある有機化合物（エタノール、酢酸、ポリエチレンなど）の構造や性質を考えることができる。
・電気陰性度を踏まえ、分子の極性の有無を判断することができる。
・共有結合の結晶の性質を結合に関連付けて理解し、結晶がどのように使われているか説明することができる。

3　生徒と単元

対象生徒は生活科学科の男子１名、女子３４名の学級である。発問に対する反応や、作業へ取り組む姿勢について、積極的な生徒が多い。理解力には個人差が見られるため、全体の理解度の向上と学習に対する達成感の獲得を目指し、少人数の班編制による学び合いの場を設定している。

本単元では、共有結合のしくみ及び分子の成り立ちについて学ぶ。中学校では代表的な分子の名称や分子式を学んでいる。本単元では、電子式や構造式で分子を表すことによって、分子の成り立ちを理解することが一番の目標である。化学を学ぶ際、目には見えない原子や分子という粒子を扱うことに対し、苦手意識を抱く生徒が少なくない。また、分子式や構造式を学んだ際に、暗記することに偏ってしまう生徒も少なくない。本単元での学習を通してどのように分子ができているのかを理解し、身近に存在する分子の構造や性質を、科学的に考えることに繋げていきたい。

4　単元の指導計画と評価規準（全３時間）

分子・・・・・・・・・・・・１／３（本時）
分子の形成・・・・・・・・・１／３（本時）
分子の形・・・・・・・・・・・・２／３
分子からなる物質・・・・・・・・２／３
電気陰性度と分子の極性・・・・・２／３
分子結晶・・・・・・・・・・・・３／３
共有結合の結晶・・・・・・・・・３／３
物質の構成粒子と物質の分類・・・・・３／３

A関心・意欲・態度	B思考・判断・表現	C技能	D知識・理解
・模型を用いて、試行錯誤しながら共有結合をつくりだすことができる。（本時） ・身近にある有機化合物の構造や性質を考えることができる。	・原子や分子を電子式で表すことができる。（本時） ・電気陰性度を踏まえ、分子の極性の有無を判断することができる。	・電子式をもとに、構造式を書くことができる。 ・構造式をもとに、分子模型を使って、分子の形を表すことができる。	・共有結合の結晶の性質を結合に関連付けて理解し、結晶がどのように使われているか説明することができる。

5　本時の計画

（1）ねらい

①模型を用いて、試行錯誤しながら共有結合をつくり出すことができる。

②原子や分子を電子式で表すことができる。

（2）展開

	学習活動	学習形態	指導上の留意点	評価
導入	1　分子式について復習する。また、分子が身近にある物質を構成していることを認識する。	一斉	・　目には見えない分子という粒子が身近に存在していることを意識できるようにする。	
	主たる発問：これらの分子は、どのように「分子」というセットになるのか？		・　ここでは、発問の正解を示さない。	
	本時の目標：電子式を使って、分子の成り立ちを説明できるようにする。			
	2　本時の目標を確認し、学習の見通しを立てる。		・　電子配置図を応用することで、分子の成り立ちを解明できると励ます。	
展開	3　手立てとして、電子式を学ぶ。 ＜予想される混乱＞ ・価電子だけでなく、すべての電子を無理矢理に電子式に入れる。 ・電子を書く位置にこだわり、進まない。	ｸﾞﾙｰﾌﾟ (模型) ↓ 個人 (ﾌﾟﾘﾝﾄ)	・　電子配置図の復習を行い、価電子を確認するよう促す。 ・　まずはｸﾞﾙｰﾌﾟで模型を使って原子の電子式をつくり、価電子の数が関わっていることを意識付ける。	原子の電子式を書くことができる。 (ﾌﾟﾘﾝﾄ)
	4　電子式から、希ガス以外の原子はやや不安定な状態になっていることを理解する。	一斉	・　電子対と不対電子の存在を示し、結合の話につなげる。	
	5　安定な状態にするために、電子対をつくるにはどうしたらよいか考える。	ｸﾞﾙｰﾌﾟ (模型) ↓	・　不対電子を組み合わせることで、共有結合ができることを模型で確認できるようにする。	班で試行錯誤しながら、共有結合をつくりだすことができる。 (ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸ、机間指導)
	主たる発問：共有結合して分子ができると、どのような電子配置になるのか？			
	6　共有結合によって、安定した分子ができることを理解する。様々な分子を電子式で表す練習に取り組む。 ＜予想される混乱＞ ・閉殻の状態をつくれていない。 ・分子の形にこだわり、進まない。	一斉 ↓ ｸﾞﾙｰﾌﾟ (模型、ﾌﾟﾘﾝﾄ)	・　共有結合によって安定な電子配置(閉殻と同じ状態)をつくっていることを全体で確認する。 ・　本時では、分子の形が直線型や折れ線型などになることは扱わない。形は気にせず、共有結合をつくり出せるようにする。	分子の電子式を書くことができる。 (ﾌﾟﾘﾝﾄ)
まとめ	7　まとめに取り組む。 ＜まとめ＞ 原子が共有結合すると安定した閉殻の状態をつくるため、分子というセットになった粒子として存在している。	一斉 ↓ 個人	・　本時で学んだ手立てや言葉を振り返り、自分でまとめを文章化する。	
	8　次時の学習の見通しをもつ。	一斉	・　CO_2やN_2は、どうやって説明したらよいかを考えさせる。(単結合では説明できない分子があることを紹介する)	

6　協議の視点

（1）グループで作業を行ったり考えたりすることで、個人で取り組むよりも習得や意欲に効果が出ていたか。

（2）班での作業や話し合い及び分子の構造の説明を言語活動として想定しているが、言語活動は適切に行われていたか。

平成２８年度教育委員会指導主事訪問
研 究 授 業 研 修 会 記 録 （ 理 科 ）

１　日　程

・平成２８年９月２８日（水）１３：３０～１４：２０（５校時）
・１年Ｈ組（３５名）（生活科学科）　物理地学実験室にて実施
・授業者　加納綾子　　司会　大沼克彦　　記録　佐々木悠華

２　研修会参加者

能美佳央指導主事　大沼克彦　伊藤寿人　佐々木惇　佐々木孝之　石垣ルリ子
古瀬利彦　羽川尚　大坂淳　照井豊和　平塚祥広　藤井亨　佐々木由貴子　佐々木悠華
髙川健悟　太田羽純　風登友美　和泉有紗　三嶋登忍　佐々木尚人　小林和成
佐藤潤之介

３　授業者からの報告（加納　綾子）

本時では電子という目に見えないものを扱う単元であり、苦手意識を抱く生徒が少なくない。そのため、生徒が電子をイメージしやすくするために模型（マグネット）を使用した。また、閉殻の状態の電子配置をつくる、共有結合をつくるといった作業を３～４名のグループ活動で行うことでお互いに試行錯誤する場面を設定した。最後には、分子の成り立ちを生徒一人一人が文章化して説明できることを目標とした。

４　協議内容

(1) 班での作業や話し合いは、個人で取り組むよりも効果が出ていたか。
(2) 班での作業や話し合い及び分子の構造の説明を言語活動として想定しているが、言語活動は適切に行われていたか。

	良かったこと	改善を要すること
協議内容(1)	・教材の工夫がされていて、グループワークが成功している。	・４人横並びの座席だったため、対面で話し合わせたほうが活発になったのではないか。 ・４人横並びであるため真ん中の２人がよく作業している。途中で席替えをしてみてはどうか。
協議内容(2)	・まとめの際、キーワードを生徒に出させ、「分子の成り立ち」を説明させている。普段の授業から実践している様子がうかがえた。	・作業をしやすい席にいる生徒が、活発に意見を言っている。
その他	・生徒が考えやすいプリントや発問の工夫がされている。 ・実物を見せて説明している。	・黒板に使用していたマグネットを色分けした方がよい。

５　指導助言　能美佳央指導主事より

言語活動については、自分の考えを他者に伝えることで学習の理解を深めることができるため、生徒の発表場面を増やした方がよい。班での話し合いの場面では、班員一人の意見になっている場合もあるので、班員全員の意見になっているか確認する必要がある。

教材の課題として、①課題を達成させるために焦点化させているか、②いろいろな視点から考えられる教材か、③資料をもとに生徒がまとめられるかが達成されると深い学びにつながっていく。

指導案に学習形態や生徒の予想を入れることで１時間の流れをさらにイメージしやすくさせている。今回作成してもらった指導案は、小学校中学校でも使われている形式なので、今後も是非使っていってもらいたい。

職員研修　ファシリテーション講習会

研修部　髙川　健悟

1　目的

ファシリテーションの基礎を、講義と演習をとおして体験することで、そのねらいを理解するとともに、授業など教育活動に活用する態度と能力を身に付ける。

【ファシリテーション】

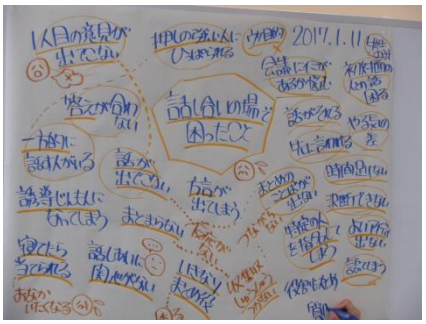
会議や授業などの集団活動がスムーズに進むように、また成果が上がるように支援することをいう。例えば、質問によって参加者の意見を引き出したり、合意や理解に向け、論点を整理する。

2　概要

日　　時	平成２９年１月１１日（水）　１３：００～１４：３０
会　　場	大曲農業高等学校　会議室
内　　容	講演「研究活動に役立つファシリテーション」 講師：まちづくりファシリテーター　平元美沙緒氏
日　　程	１３：００　開会 １３：０５　講師自己紹介、全体説明 １３：２０　意見交換およびレクチャー ・良い話し合いの場とは ・ワークショップ、ファシリテーター、ファシリテーションとは ・話し合いの場のちょっとしたコツ大公開 ・研究活動（ＤＡＩＮＯプロジェクト）に関する意見交換 ・さまざまな話し合いの場の事例紹介 ・良い話し合いの場をつくるために大切なこと １４：３０　終了

3　活動の様子

演習の様子



「話し合いの場で困ったこと」

本研修では、話し合いの場の作り方について、講師の平元氏より実例や演習を交えながら指導をいただいた。講義の他にも様々な演習を取り入れ、動きのある研修となり、先生方からも沢山の意見が出された。それ以外にも、話し合いを円滑に進めるためのコツや、「アイスブレイク」「バズセッション」「グランドルール」などファシリテーションの様々な技法を紹介いただいた。

今回の内容は話し合いの場だけでなく、普段の授業や課題研究にも活用できる内容であった。

hyper-QU に関する研修会

保健部　湯澤　美千代

第1回	研修項目	hyper-QU について	期　　日	平成 28 年 4 月 19 日（火）15:30～17:00
	会　　場	大講堂	参加者数	30 名
	講　　師	秋田県立由利工業高等学校　教諭　成田　実　先生		

急激に変化していく社会環境に伴い、多様化、深刻化している生徒達の心の問題を早期に発見、対応し、いじめや不登校等の防止に役立てるため、今年度 hyper-QU というアンケート調査を導入した。その QU について理解を深めるため、由利工業高校の成田実先生を講師としてお迎えし、研修会が行われた。全職員で共通理解をはかり、実施に向けての準備を整えることができた。

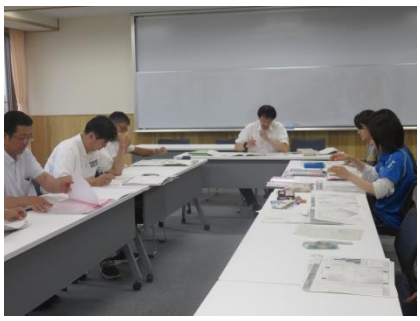
＜内容＞

1．なぜ「QU」？
　・望ましい学級集団に成立させるには、集団内の規律（ルール）と子ども同士の良好な人間関係（リレーション）が最低限の条件であるため。
2．「QU」から何がわかるの？
　・学級満足度尺度、学校生活意欲尺度、ソーシャルスキル。
3．QU が測っているもの
　・子ども達個人、学級集団、学級集団における各子ども達の相対的位置関係。
4．教師のリーダーシップ　　5．教師の勢力資源
6．学級のリーダーの育て方
　・リーダーシップよりもメンバーシップを育てる。
7．QU プロット図の見方
　・教師のリーダーシップ型でプロット図が縦型、横型、拡散型、ひろがりのある満足型と分かれる。
8．学級コンサルテーション
9．秋田県内の QU の活用状況

QU 実施の様子

第2回	研修項目	hyper-QU について②	期　　日	平成 28 年 7 月 6 日（火）13:30～15:30
	会　　場	会議室	参加者数	20 名
	講　　師	秋田県立由利工業高等学校　教諭　成田　実　先生		

講師の成田先生



分析会の様子

再度、由利工業高校の成田実先生を講師としてお迎えし、QU の結果について分析会を行った。クラスの公式なリーダー、非公式なリーダー、クラスの小グループ等、色ペンで QU 結果のプロット図に書き込み、人間関係やクラスの傾向を分析した。時間を区切り学年ごとに実施したため、気軽に成田先生とやりとりしながら、気になる生徒への対応や今後のクラス経営の方向性についてのアドバイスをいただくことができ、大変有意義な研修となった。

校内互見授業参観記録

月／日	校時	クラス	参観者	授業者	教科(科目)	（1）良い点	（2）改善すべき点	（3）その他
1／24	5～6	3課研	藤井 亨	高橋寿徳	作物	・生徒が主体的にプロジェクト発表のスライド作成・原稿作成・発表練習を行っていた。テレビモニターに接続し、全員が発表準備に携わっていた。 ・平素からの個に応じた指導が行き届いているように感じた。		・お疲れ様でした。
1／25	3	3B	菅原久美子	佐々木梢	日本史A	・デジタル機器の活用。視覚的に理解しやすい。 ・話のテンポ	・プリントの語句を一生懸命うめていたが、せっかくの話を聞けていないのではないかと思った。話を聞かせてからプリントを埋めていってもいいのかなと考えました。	
2／2	1	1C	古戸 毅	藤井 亨	農業と環境	・常に笑顔があり、よく通る声で説明している。 ・３色のチョークを使い分け、板書が大きいため教室後方に座っている生徒でも大変見やすい。 ・実物や酸度測定の様子をPCカメラを通してモニター大画面に映し出すことで視覚的にも理解が深められ、説明の検証に説得力がある。 ・説明した実験機器を回覧することで関心を喚起している。 ・生徒たちとの意思の疎通が円滑であるため、発問に対しての返答がある。	・本時の目標が黒板に記されているとよい。 ・机間巡視をして教室後方生徒に学習状況などを把握、助言するとよい。 ・生徒の音読時、小声で聞き取りにくい場合は少し大きな声で読んでほしいとアドバイスするとよい。	・PC画面から教室モニターに投影できるカメラを購入し、実験・検証および測定の様子や実物、インジケーター、図表などを大画面で見せて生徒の視覚を刺激することにより、興味や関心、理解が深まるような授業を展開したいと思いました。
2／8	1	1S	伊藤寿人	藤井 亨	農業情報処理	・板書がきれいでわかりやすい。 ・発問の声が大きくわかりやすい。主たる発問もよく理解されていた。 ・本時の目標は個々の特性を生かせるプレゼン制作であり、工夫されていた。 ・生徒同士で分からない内容を協力して解決する場面が見受けられた。 ・教科書、ノート、筆記用具が準備されていた。 ・机間巡視できめ細かな技術指導が行われていた。 ・プレゼン制作に真剣に取り組んでおり、意欲が感じられた。	・着席する姿勢の悪い生徒がいたので姿勢を正してあげるとよい。 ・制作したプレゼンの発表会で学習内容を共有していただきたい。	

2 / 8	1	1B	高川健悟	高橋華子	国語総合	・生徒が集中して授業に取り組み、検定の合格に向けて、課題に取り組んでいた。課題演習の時間に参観させていただいたが、集中して取り組む様子に驚いた。これも普段の授業における指導によるものであると感じた。		・授業における規律などの点や、目標を持って授業に取り組めるよう適切な目標設定などについて参考にしていきたい。
2 / 9	6	1A	古瀬利彦	菅原久美子	数学Ⅰ	・プロジェクターを利用し、板書の時間を省いている。（係に頼めないので、休み時間に準備するのはそれなりに大変そう） ・指名した生徒に考えさせている間にも机間巡視をし、個別指導している。 ・指名された生徒に次に当てる人を指名させ、全体を巻き込んでいる。 ・英語の時間より生き生きしている生徒がいる。	・仕方ないが、投影された画像や、文字が不鮮明であった。	・英語のプリントをやらせるとき、分からなくてそれ以上進めないと寝てしまう人が数人いるので、行き詰らせない工夫が必要であると感じた。 ・英語より数学が得意な生徒が周りの生徒に教えるなど、リーダーシップを発揮していることが分かってよかった。

PTA 研修会

研修部　　菅原　久美子

今年度の PTA 研修会も、昨年と同様に大嶋農場見学とジャム作り体験を行いました。２６名の保護者の方に参加していただきました。昨年度実施したところ、「今度ははなびピザ作りも体験したい」というご意見もありましたが、なかなか都合が合わず、今回もジャム作りとなりました。

最初に大嶋農場の見学を行いました。田口先生の丁寧な説明に聞き入っていました。また今年度で水田収納調整室が解体されることを聞き、本校を卒業した保護者の方々からは懐かしむ声や惜しむ声が上がっていました。

その後、学校に戻り、温室や畑の見学を行ってからイチゴジャム作りの実習を行いました。新しくなった作業工程室では三嶋先生から施設設備の説明が行われたあと、ジャムのあくを取ったり、瓶に詰めたりする工程を体験しました。

ジャムを殺菌している間、介護実習室では、はなびピザとジャムの試食が行われました。試食用に出していただいたジャムもあっという間になくなり、おいしいという声がたくさん聞かれました。最後に殺菌が終わったジャムにラベルを貼って完成。お土産として持ち帰っていただきました。

今回もたくさんの保護者の方に参加していただいて様々な感想を頂くことができました。これからも内容を充実させながら研修会を実施していきたいと思います。

平成２８年度 PTA 研修会　参加者の感想（(　) 内は子どもの学年）

2016/11/12 実施

○普段見ることが出来ない大嶋農場等を見学し、動物や実習棟を見せてもらえることは大変貴重な時間になりました。ジャム作りも家ではやらないし楽しかったです。参加して良かったです。（１年）

○大農ならではの内容だと思います。畜舎でも参加した人全員が中の動物たちを見学し、それぞれ感じたことが多くあったと思います。ジャム作りも充実した内容でなんだか授業を受けているようでした。また参加したいと思います。（１年）

○いろんな場所をみれて大変楽しく思いました。子どもの話でしかわからなかった農場が見れたのが本当に良かったです。鶏の鳴き声も豚の鳴き声も牛の鳴き声もすべて違って、においも体験できてびっくりしましたが、生き物にふれられて学習できるのがすばらしいことだと思いました。(子どもは鶏がこわい!!と言っていましたがわかる感じがしました) 花がきれいに咲いていて心がなごみました。果樹園の方が見れなかったのが残念です。果樹部部長の母としては・・・おいしい大曲はなびピザも温かいうちにいただけて大満足です。ジャムのおみやげまであるし、来年も参加して新しい農場も見てみたいです。(１年)

○普段子どもから聞いている学校での様子を実際に農場など見学させていただけたので、また子どもの話を聞けるのが楽しみです。学校での研修会はとても良かったです。先生方の説明も楽しかったです。素晴らしい学校に子どもが通えて良かったです。農場見学やジャム作り、試食楽しかったです。同じ学年の保護者の方とお話しできて楽しい時間でした。ありがとうございました。(１年)

○いつも子どもから話を聞いていた農場を見学でき、何をしているのかをイメージすることが出来てよかったと思います。加工についても興味を引かれることが多くあり、とても参考になりました。学校の他の施設や何を学習しているかなど､視点を変えて毎年研修を行っていただければと思いました。(１年)

○新しくできる大嶋農場が楽しみです。ピザもおいしくいただきました。ありがとうございました。楽しかったです。(１・３年)

○農場に行くのも初めてだったので雰囲気、子ども達の日頃の実習でどのような事を経験しているか感じられることができてぜひ今後も参加したいし続けてほしいと思います。ジャム作りの見学、はなびピザの試食、大農らしい活動ですね。実際に経験でき、楽しかったしおいしかったです。計画・運営してくださったみなさんに感謝です。(１年)

○昨年に引き続いてのリピーターです。ジャム作りはやっぱり楽しいです。今度は野菜の収穫などしてみたいです。大農祭で欲しかったものが購入できなかったので、ＰＴＡの時に販売もしていただけると嬉しいです。新校舎の見学会もあればいいと思います。(２年)

○今年で２回目です。新しくなった加工室、すばらしかったです。はなびピザもおいしくいただきました。来年もぜひ参加したいと思います。(２年)

○子ども達の学習内容がわかりおもしろかったです。花などの育っている途中過程ももう少し見たかったかなと思いました。子豚ももう少し小さいうちに見られたらよかったと思います。牛等はいろいろな専門的な事がわかっておもしろかったです。はなびピザはいろいろなアイデアが詰まっていて簡単にだったら自宅でも作ってみようかと思いました。ジャム作りも楽しく､とても楽しい研修でした。ありがとうございました。(２年)

○今日は楽しく参加させていただきありがとうございます。毎日子ども達が勉強している学校をこの研修会で見ることが出来て良かったです。ジャム作りやはなびピザもおいしく、ありがとうございます。牛舎や温室もとても管理されていて良い環境で学ばさせていただいていると感じました。先生方にもお手数をおかけしました。ありがとうございました。(２年)

○昨年も参加させていただきました。今年度は新校舎でのジャム作り体験、特に器具などいろいろな物に感動しました。次年度もまたぜひ同様の体験を希望します。研修会には　関係ありませんが、食品や花などの販売についてもう少し知る機会があればいいなと思っています。最後に大嶋農場の稲作の建物も来年は見たいと思っています。（新しくなるのが楽しみです）（２年）

○初めて参加させていただき、普段の子ども達の勉強風景が思い浮かんでくるようでとても有意義な時間でした。何気なく食べ物や野菜等を買っていましたが、それまでの過程にたくさんの人の思いも込められていることにも気づくことが出来たように思います。ありがとうございました。（３年）

○子どもから大嶋農場の話が出るたび、どんなところだろうと思っていました。今回の研修会で見学できると知り、参加したいと思いました。実際にニワトリ、豚、牛を見学し、自分の子どもはここでがんばっているんだなと感激しました。また、ジャム作りも体験させてもらい、本当に参加してよかったと思いました。違う学年の父兄の方達との交流　を持つことができ、こういう研修会はこれから先もずっと続けていって欲しいと思います。高校は小・中学校と違い、入学式、卒業式以外は他の父兄の方とは会う機会は本当に少なく、こういう場でたくさんの人とふれあえることは本当にありがたいと思います。　（３年）

○初めての参加でした。大農ということで家畜や野菜、加工など見るものも初めてでとても感動しました。日頃子ども達はどんな様子で取り組んでいるのかなと感じました。とても人なつこい動物たちと触れ、それがいずれは加工されてしまう・・・そんなことを考えるととても切なく、命の尊さ、ありがたさを感じますね。卒業するまでには一度は見てみたいと思っていたので、とても嬉しかったです。よい企画だと思います。（３年）

○色々とご準備お疲れ様でした。子ども達が生き物や植物などに触れてのびのびと学校生活を送っていることがよくわかる研修会でした。大農に入学させていただき、３年間ここまでこられたのも先生方のおかげです。本当にありがとうございます。（３年）

○以前から農場に行ってみたいと思っていました。子ども達から聞いてはいましたが、生き物は大変だなと感じました。ジャム作りを体験でき、楽しかったです。（３年）

○普段子ども達が学んでいる農場や温室を見学することができ、生き物や植物がどのようにしているかを知ることができました。子ども達が多くのことを学べるすばらしい学校を見ることができ、参加してよかったです。（３年）

○今日はお世話様でした。いい体験をさせていただきありがとうございます。ジャム作りも楽しくできました。はなびピザもおいしくいただきました。（３年）

○今回は農場を見せていただいたり、ジャム作りに参加させていただき、楽しい時間を過ごす事ができました。特に農場に行ける機会はなかなかないので、どんな所なのか興味があったので行けて良かったです。はなびピザは聞いて知っていましたが初めて食べました。とてもおいしかったです。ごちそうさまでした。大農はいろいろな体験ができて子どもも楽しく学校生活を送ることができました。（３年）

〇お休みの日にたくさんの先生方に大農の農についていろいろと教えていただき大変有意義でした。ありがとうございました。この企画に参加しなければ見たり体験できないことばかりで、たくさんの親御さんに見てほしいなあと感じました。畑の先生にご無理を言ってネギをわけてもいただきました。本当にありがとうございました。（３年）

〇孫の学校の様子を見ることができ、大変嬉しかったです。おみやげたくさんありがとうございました（３年）

〇息子に「楽しそうだよ！行ってみたら！」と声をかけてもらい参加しました。日頃から実習で勉強していることなど話はよく聞くのですが、いろいろ想像するもこうやって実際見学できると子ども達が頑張っているんだな～とうれしく感じました。生き物の扱いは若い子達にはくさいし、汚いし、嫌がることも３年間楽しんでやってくれたことをうれしく思います。いちごジャム作りも楽しかったです。はなびピザも知ってはいてもいただく事はなかったのでおいしかったです。もうすぐ卒業ですが３年間ありがとうございました。（３年）

〇大変楽しかったです。今回のジャムは粒が大きくおいしくできあがったように見えます。さっそく食べてみたいです。大農加工部で作っている加工物、草花（シクラメン）も一般にどこかで買うことができたらいいなと思います。

〇農場での子ども達の様子が見えてくるようでした。校舎も少しずつ新しくなり、今回参加できてよかったと思います。次年度は卒業生や地域の方にも参加していただくというのはどうでしょうか？先生方に御難儀おかけしました。ありがとうございました。

教職５年経験者研修を終えて

教諭　佐々木　由貴子

１　はじめに

採用から５年が経過し、教職５年経験者研修を受講させていただいた。育休で長く現場を離れていたため、各学校で活躍されている同期の先生方に大いに刺激を受けながら、鈍った頭をフル回転させての受講となった。２回の講座の概要と、特に印象に残った点について記したい。

２　概要

目標	授業改善、生徒指導等の専門的な事項についての研修を通して、実践的な指導力の向上を図る。	
Ⅰ期	６／１５（水）	○生徒理解と人間関係づくり（講義・演習） ○これからの高等学校に求められる授業改善①（講義・協議・演習）
Ⅱ期	９／２（金）	○教師が使えるカウンセリングの技法（講義・演習） ○これからの高等学校に求められる授業改善②（講義・協議・演習） ○学校教育目標とホームルーム経営（講義・演習）

３　生徒理解と人間関係づくり

生徒の様々な問題行動に直面すると、「なぜ」という原因を考えがちだが、そうではなくその行動の「目的」を考えることと、それを踏まえた対応について段階別に指導していただいた。過去にかかわった生徒の事例を振り返ると「こういうことだったかもしれない」と思う部分があり、その時の自分の指導の至らなさを痛感した。また、人は問題状況になると、被害者意識を持ったり、自分を責めたり、他者（生徒や保護者、中学校等）の責任を追及しがちで、教師も同様であるとの指摘があった。「目の前にいる生徒のために、今、自分ができることは何か」という主体的・未来志向的な考え方で、問題行動の未然防止や生徒の成長を促す生徒指導にあたることの重要性を感じた。

人間関係づくりについては、各学校の「居場所づくり」「絆づくり」にかかわる活動の紹介があった。「丁寧なオリエンテーションやガイダンス」「社会とつながる実感を持てる体験的な学習」「地域の方々との幅広い交流、異年齢交流ができるボランティア活動」等は本校でも力を入れている取り組みであり、今後も継続し、「自己有用感」の獲得や「絆づくり」の機会となるようにしていきたい。

４　これからの高等学校に求められる授業改善

Ⅰ期では、工業の先生方と合同で「教科指導上の悩みや課題及びその解決に向けて取り組んだ具体的事例」「言語活動の充実を図り、生徒の主体性を引き出す授業づくりを意識した実践事例」についてレポートを持ち寄り、協議を行った。工業の先生方からは、中学校や専攻科の指導もされている中で、年齢も学習歴も異なる様々な生徒に対する指導に悩み、工夫を重ねているお話を伺った。教科は違っても抱える課題には共通する点も多くあった。

Ⅱ期は「農業」・「商業」の先生方と合同で、お互いの授業ＤＶＤを見ながら、成果と課題、改善策を協議した。Ⅰ期で学んだ「アクティブラーニング」や「言語活動の充実」のほか、「ジグソー活動」「ルーブリック評価」「ICT の活用」などが取り入れられており、勉強になる点が多くあった。

５　終わりに

今回の研修を通し、これまでの自分を振り返るとともに、今後求められる役割についても考える機会となりました。また、家庭科教員は単数配置が多く、私は家庭科の同期採用もいない中、教科指導や生徒指導について情報交換ができ、指導してくださる先生方の存在を、改めて心強くありがたく感じております。生徒・職員・保護者に信頼される教員になれるよう今後も研鑽を重ね、初心を忘れず真摯に日々の仕事に取り組んでいきたいと思います。

教職５年経験者研修を終えて

教諭　髙川　健悟

１　はじめに

教職５年経験者研修を終え、これまでの取り組みを振り返り、今後さらなる向上に向けて、自らのあり方を振り返り見直すとともに、これから身に付けていかなければならない力を考えることができる有意義な研修であった。５年の教職経験で直面し、向き合ってきた課題に対して一つの指標を得ることのできる研修であった。その内容について以下の項目で述べたい。

また、今年度、自転車競技東北大会引率のため、２期の日程のうちの１期目を欠いてしまい、１期目については資料に目を通すのみとなってしまったため、主に２期目の内容について記載したい。

２　概要

研修の目標		対　象
授業改善、生徒指導等の専門的な事項についての研修を通して、実践的な指導力の向上を図る。		教諭として採用されて６年目で、今年度高等学校に所属する教諭
期	日　時	内　容
Ⅰ	6/15（水） 10:00～16:15	○生徒理解と人間関係づくり（講義・演習） ○これからの高等学校に求められる授業改善①（講義・協議・演習）
Ⅱ	9/2（金） 10:00～16:15	○教師が使えるカウンセリングの技法（講義・演習） ○これからの高等学校に求められる授業改善②（講義・協議・演習） ○学校教育目標とホームルーム経営（講義・演習）
携　行　品		全期：担当教科の「高等学校学習指導要領解説」（文部科学省） Ⅰ期：授業改善や教科指導上の課題に関する資料等 Ⅱ期：「学校要覧」 授業内容を収録し１５分程度に編集したＤＶＤ・指導案・参考資料
提　出　物		・教科指導上の悩みや課題について ・言語活動の充実を図り、生徒の主体性を引き出す授業作りを意識した実践事例のレポート ※Ⅰ期欠席のための提出書類

３　教育センターにおける講座

Ⅰ　教師が使えるカウンセリングの技法

この講座においては、カウンセリングを要する生徒の事例を基に演習と講義形式で実施された。現在担当しているクラスにおいても、カウンセリングを要する生徒を受け持っており、提示された事例と重複する場面が多々あり、自らの指導方法と重ね合わせながら研修に参加した。教師側からの声かけや働きかけ方について、自身の良い点や改善点を考え、今後の学級経営において参考になる点が多々あった。今後、研修で学んだ技法を今後の教育活動に取り入れていきたい。

Ⅱ　学校教育目標とホームルーム経営

ＳＷＯＴ分析を用いたホームルーム経営の改善に関する演習を行った。ＳＷＯＴ分析とは、組織を、「強み(Strength)」「弱み(Weakness)」「機会(Opportunity)」「脅威(Threat)」の４つの軸から評価する手法のこと。企業戦略の立案時などに用いられる。「強み」「弱み」の軸は企業の内部要因であるとされ、一方、「機会」「脅威」の軸は外部要因とされ内部要因と外部要因とをそれぞれ軸にした表を作成し分析することで、経営の分析を行うのがＳＷＯＴ分析である。

本研修では、この企業で用いられるＳＷＯＴ分析をクラス経営の分析に取り入れる方法が紹介され、演習に取り組んだ。

私自身、なかなかクラス経営を見直す時間を十分に確保できているという自信もなく、漫然と過ごしていたということを強く感じた。その中でも研修を通して、ホームルーム経営の検証をする機会となり、分析の結果から今後の経営方法の方針を立てることができた。今後もよりよいクラス経営を目指して分析を定期的に行い、よりよいクラス作りを行っていきたい。

4　これからの高等学校に求められる授業改善

授業改善においては教科「家庭」・「商業」の先生方とともに、学校で行った授業を撮影し、編集したＤＶＤを見ながらそれぞれの授業の改善を図った。どちらの教科の先生方もアクティブラーニングの視点を取り入れた授業を展開していた。私の授業においては、私自身納得できる授業ではなくまだまだ改善の余地があると痛感した。その中でも特に印象に残ったのが、商業の先生の授業であった。ジグソー法を取り入れ、クロストーク活動を行っていた。また、その授業を展開するために事前学習を大切にしており、その日その日の単発の授業ではなく、関連付いた授業を展開していた。

今後、授業での言語活動の充実を図るためにも、参考にして取り入れていきたい。また、自分の授業においては改善点が多く、常にアクティブラーニングの視点を持ち、授業改善を図りながら、教材研究にも力を入れていきたい。

5　おわりに

教職５年経験者研修を通し、これまでの自身を見直し、さらに向上していくための転機担ったように感じる。また、これまでの自分の事だけという考え方だけでなく、学校全体を見ながら自分の役割を果たしていかなければならないと感じる研修であった。今後も継続して研修を重ね、自らの能力の向上とともに学校における自分の役割を果たすことができる、人材を目指していきたい。

最後にこのような研修の機会を与えていただき、ご指導いただいた方々に感謝申し上げます。

教職１０年経験者研修を振り返って

教　諭　　平塚　祥広

１　はじめに

１０年経験者研修に参加させていただき、これまで自分が行ってきた指導を振り返りながら、改善し、新たなキャリアを積み重ねる良い機会を与えていただいたことに感謝したい。

多くの研修をとおして改めて生徒との関わり方を振り返り、農業教員としての役割を考えさせられた１年となった。学校運営に参画するミドルリーダーとして自らが身に付けなければならない資質を再確認し、不足する部分を補ううえで多くの経験を積むことができた。今後教職員として生徒とかかわる中で確認した多くのことを報告していきたい。

２　総合教育センター研修

Ⅰ期に講堂で行われた「質の高い授業研究を継続的に進めていくための方略」において、秋田県の教育が全国に誇れるものに「教職員間のチームワーク」が挙げられた。このチームワークを支えているのがベテランと若手教員の楔となるミドルリーダーであり、この研修は秋田県の教育を支えている土台をより強固にすべき研修であると自覚させられた。特に基礎学力を定着させたうえで、自ら考え、行動する力を生徒に身に付けさせることは将来地域を支える人材育成に直結しており、学力偏重になることなく生徒の個性に合わせた柔軟な指導力を身に付けていかなければならず、勤務校の「あたりまえ」にとらわれない視野を身に付ける必要性を感じた。

一つ一つの研修に新しい発見があり、どれもが自らの仕事に直結する意義深いものであったが、とくにⅢ期に行われたいじめ問題を含む教育相談やカウンセリング法は非常に印象深い内容であった。

いじめ問題はその定義が明確になって以降、認知件数は増加傾向にある。一方でいじめを認知することが学校としての評価を下げることにつながるという誤った認識がいまだ多く、いじめを根絶するうえで障壁となっている。教員として生徒に向き合うときに集団内にはいじめが起きているという危機感を持ちながら早期に認知し、チームで対応することが重要である。先述したように、秋田県が全国に誇れる教育は教職員間のチームワークであり、学力面だけではなく生徒指導の面においてもこのチームワークを活用していかなければいけないと考えた。

また、カウンセリング手法においても生徒に接する場面や保護者に説明する場面など具体的な事例が示された。本校に在学する生徒にも自分の思いを上手に伝えられない生徒が増加しており、そういった生徒の言葉を補いながら気持ちを開いていくうえで「傾聴の姿勢」が大事であると再認識することができた。

総合教育センターにおける研修では他校の事例を聴く機会が多く、自分に不足しているスキルを持った先生方から多くのアドバイスをいただくことができた。クラス運営や部活動指導において即実践できたものも多く、自分自身が大きくスキルアップできたと思っている。

３　教科研修

・期日及び会場　　平成２８年９月１３日（火）　秋田県立秋田北鷹高等学校
・指導科目及び学年　　農業「草花」　１年Ｎ組３５名

高校教育課が主催する教科研修は秋田北鷹高校を会場に行われた。秋田北鷹高校は北秋田市の４校が合併して開設された学校であり、校内の温室配置や授業風景を参観するだけでも参考になる部分が多かった。

授業は生物資源科の１年生を対象として行ったが、授業に対する生徒の目が輝いており、日常の授業がアットホームな雰囲気の中で行われていることを感じ取ることができた。また、発問に対する生徒の受け答えも非常に優れており、このような授業環境を作り出している北鷹高校のレベルに感心するばかりであった。

金足農業高校の照内之尋先生も同時に研修を行ったため、参観させていただくことができた。教材の選択や生徒に対する受け答え､授業のメリハリなど学ばなければならない事ばかりの授業であった。終了後に岸弘昭指導主事や北鷹高校で草花を担当する金仁史先生からアドバイスをいただくことができ、他校での授業ではあったが、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。

４　企業研修

・期日及び会場	平成２８年８月１０日（水）～１２日（金）	合資会社　栗林生花店
・作業日程	１０日	草花の収穫および調整　フラワーアレンジメント講習会
	１１日	仏花の調整　　生け花講習会　　アレンジメントと配送
	１２日	仏花の調整　　アレンジメントと配送

企業研修は普段からフラワーアレンジメントの講師としてお世話になっている栗林生花店で行わせていただいた。お盆前の多忙な時期に受け入れていただいたことに改めて感謝している。

平成２９年度から園芸科学科がスタートすることもあり、草花の加工を中心として実践する機会を多く与えていただいた。また、本校で試験栽培を行っているトルコギキョウを中心としてフラワーアレンジメント講習会を開催していただき、地域の皆様に「大農のトルコギキョウ」をＰＲする機会をいただいた。新学科やフラワークリエイトコースの設置について興味を持ってくれる方や、学校に切り花を注文してくれる方もおり、教科指導や農場運営に直結した研修ができたと思っている。

入学時に生花店で働くことを希望する受検生に対して、店頭販売だけでなくその経営手法や技術を学ぶことができた。華やかな表舞台とは別の仕入れや開花調整など専門的な知識と技術は実際に働いてみなければわからないことが多く、今回の研修でこれらの一部でも学ぶことができたことは大きな収穫であった。

５　まとめ

１０年経験者研修の一つ一つが、学校運営に参画するうえで非常に有意義であった。教員生活を振り返り、他校の実践事例を聴く機会が自らのマンネリ化を防ぐ良いきっかけとなり、それらの刺激が自らの新たな目標になるなど、日常の学校生活だけでは得られない多くの知識や経験となったように感じている。

また、今年度はスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール（ＳＰＨ）事業に採択され、事業の一環で岐阜県の農業研修センターおよび国際園芸アカデミー、花フェスタ記念公園で研修させていただくことができた。１０年という節目に多くの研修機会を与えていただいたことに感謝したいと思っている。今後は今回身に付けた様々な経験や技術を若手教員に伝えられるようミドルリーダーとしての自覚を大切に生徒と接し、学校運営に参画していきたいと考えている。

平成２８年度

第４６回学校運営等研究協議会

主催　全国農業高等学校長協会

後援　文部科学省

期日　平成２８年７月２１日（木）・２２日（金）

会場　国立オリンピック記念青少年総合センター

（センター棟３階３０９室）

参加者および報告者　教諭　大沼克彦

参加者

平成28年度第46回学校運営等研究協議会　　7/21～/7/22

NO	県名	学校名	受講者氏名	ふりがな	職名・校務分掌	研究協議会	教育懇談会
1	北海道	北海道岩見沢農業高等学校	齋藤 克幸	さいとう かつゆき	主幹教諭	○	○
2	青森県	青森県立三本木農業高等学校	北上 守	きたかみ まもる	教諭・渉外部主任	○	○
3	青森県	青森県立名久井農業高等学校	村崎 匡利	むらさき まさかつ	教諭・生徒指導部	○	○
4	岩手県	岩手県立花巻農業高等学校	箱石 健	はこいし たけし	教諭・農場部・農場長	○	×
5	岩手県	岩手県立北上翔南高等学校	石川 英勝	いしかわ ひでかつ	教諭・農場課	○	○
6	宮城県	宮城県柴田農林高等学校	尾身 宣彦	おみ よしひこ	教諭・教務部長	○	○
7	秋田県	秋田県立大曲農業高等学校	大沼 克彦	おおぬま かつひこ	生物工学科長	○	○
8	山形県	山形県立新庄神室産業高等学校	折原 辰悟	おりはら よしのり	教諭 農場長 生物生産科長	○	○
9	茨城県	茨城県立水戸農業高等学校	軽田 清孝	ひるた きよたか	教頭	○	○
10	茨城県	茨城県立石岡第一高等学校	松原 秀雄	まつばら ひでお	教諭・農場長	○	×
11	栃木県	栃木県立栃木農業高等学校	藤野 康之	ふじの やすゆき	教諭・農場長	○	○
12	栃木県	栃木県立那須拓陽高等学校	高野 寿映	たかの としあき	教頭・指導担当第2教頭	○	○
13	群馬県	群馬県立富岡実業高等学校	鏑貫 定男	わたぬき ただお	教頭	○	○
14	群馬県	群馬県立勢多農林高等学校	栗原 宏泰	くりばら ひろやす	教諭・バイオテクノロジー科主任	○	○
15	埼玉県	埼玉県立熊谷農業高等学校	中村 篤介	なかむら ようすけ	教諭・生徒指導主任	○	×
16	埼玉県	埼玉県立羽生実業高等学校	三澤 賢一	みさわ けんいち	教諭・農業経済科長	○	○
17	千葉県	千葉県立大網高等学校	渡邊 勝幸	わたなべ ともゆき	教諭・農業経済科長	○	○
18	千葉県	千葉県立組農業高等学校	小滝 一志	こたき かずし	教諭・教務部	○	○
19	東京都	東京都立瑞穂農芸高等学校	江森 忍	えもり しのぶ	主幹教諭・教務部(主任)	○	○
20	東京都	東京都立園芸高等学校	田中 嘉	たなか よしみ	主任教諭・進路指導部(主任)	○	○
21	神奈川県	神奈川県立平塚農業高等学校	嶋田 治義	しまだ はるよし	総括教諭・生徒会班(班長)	○	○
22	神奈川県	神奈川県立中央農業高等学校	巻島 弘敏	まきしま ひろとし	総括教諭・農場グループ	○	○
23	山梨県	山梨県立笛吹高等学校	中村 芳仁	なかむら よしひと	教諭 野外部主顧主任 果樹園芸科副主任	○	○
24	山梨県	山梨県立北杜高等学校	塩野 哲男	しおの てつお	生徒会主任	○	○
25	静岡県	静岡県立天竜高等学校	森 健司	もり けんじ	教頭	○	×
26	静岡県	静岡県立富岳館高等学校	板子 忠	いたこ ただし	農場長	○	○
27	新潟県	新潟県立村上桜ヶ丘高等学校	近藤 和之	こんどう かずゆき	教諭・2年担任、生徒指導	○	○
28	長野県	長野県佐久平総合技術高等学校	荻原 正道	はぎわら まさみち	教諭・農業科長	○	○
29	長野県	長野県南安曇農業高等学校	小池 晃	こいけ あきら	教諭・農場主任	○	○
30	愛知県	愛知県立半田農業高等学校	濱砂 聡	はますな さとし	教諭・教務主任	○	○
31	岐阜県	岐阜県立岐阜農林高等学校	安藤 耕作	あんどう こうさく	教諭 教務部、食品科学科 主任	○	○
32	岐阜県	岐阜県立郡上高等学校	佐藤 康成	さとう やすなり	教諭 森林科学科 主任	○	○
33	三重県	三重県立四日市農芸高等学校	奥田 毅	おくだ つよし	教諭・農業部主任	○	○
34	京都府	京都府立桂高等学校	前口 良太郎	まえぐち りょうたろう	教諭・教育企画部	○	○
35	兵庫県	兵庫県立播磨農業高等学校	大永 秀徳	おおえ ひでのり	農業部長	○	○
36	奈良県	奈良県立磯城野高等学校	井上 雅之	いのうえ まさゆき	教諭・第3学年主任	○	○
37	鳥取県	鳥取県立倉吉農業高等学校	岡本 功	おかもと いさお	教諭・学年主任	○	○
38	島根県	島根県立出雲農林高等学校	黒崎 千春	くろさき ちはる	教諭・教務	○	○
39	島根県	島根県立松江農林高等学校	立石 篤	たていし あつし	教諭・教務	○	○
40	岡山県	岡山県立新見高等学校	山部 信弘	やまべ のぶひろ	副校長	○	○
41	岡山県	岡山県立勝間田高等学校	森 誠一	もり せいいち	教頭	○	○
42	広島県	広島県立西条農業高等学校	中津 茂生	なかつ しげお	教諭・食品科学科長 1学年主任	○	○
43	山口県	山口県立山口農業高等学校	吉原 博敏	よしはら ひろとし	教諭・農場主任	○	○
44	徳島県	徳島県立那賀高等学校	谷本 晃成	たにもと あきのり	教頭(生徒指導、農業科担当)	○	○
45	香川県	香川県立農業経営高等学校	佐藤 広明	さとう ひろあき	農場長	○	○
46	愛媛県	愛媛県立伊予農業高等学校	森 洋明	もり ひろあき	教諭・教務主任	○	○
47	福岡県	福岡県立行橋高等学校	佐藤 法孝	さとう のりたか	指導教諭・農場長	○	○
48	福岡県	福岡県立田川科学技術高等学校	金子 拓広	かねこ たくひろ	教諭・農場長	○	○
49	佐賀県	佐賀県立伊万里農林高等学校	松本 英裕	まつもと ひでひろ	教頭・総括補佐	○	○
50	佐賀県	佐賀県立高志館高等学校	山田 豊	やまだ ゆたか	指導教諭・教務主任	○	○
51	長崎県	長崎県立諫早農業高等学校	中島 嘉康	なかしま よしやす	教諭・教務主任	○	○
52	熊本県	熊本県立鹿本農業高等学校	寺原 聡一	てらはら そういち	教諭・バイオ工学科主任	○	○
53	熊本県	熊本県立八代農業高等学校	田添 裕治	たぞえ ゆうじ	教諭・農場長	○	○
54	宮崎県	宮崎県立都城農業高等学校	髙橋 徹	たかはし とおる	主幹教諭・教務主任・学科主任	○	○
55	宮崎県	宮崎県立小林秀峰高等学校	青屋 孝士郎	あおや こうしろう	教諭・農場長	○	○
56	東京都	東京都立園芸高等学校	徳田 安伸	とくだ やすのぶ	校長・理事長	○	○
57	北海道	北海道岩見沢農業高等学校	西田 丈夫	にしだ たけお	校長・副理事長	○	○
58	群馬県	群馬県立勢多農林高等学校	福島 実	ふくしま みのる	校長・副理事長	×	○
59	東京都	東京都立農芸高等学校	岡本 利隆	おかもと としたか	校長・常務理事	○	○
60	東京都	全国農業高等学校長事務局	松林 謙悟	まつばやし けんご	事務局長	○	○
61	東京都	全国農業高等学校長事務局	武藤 真貴子	むとう まきこ	事務局	○	○
62	東京都	全国農業高等学校長事務局	菱池 惠子	ひしいけ けいこ	事務局	○	○
63	東京都	全国農業高等学校長事務局	髙木 啓子	たかぎ けいこ	事務局	○	○
						62	59

日程

７月２１日（木）

９：００～１０：００　受付

１０：００～１０：２０　開講式

１０：２０～１１：３０　講演

講演テーマ　「これからの時代の人材育成」

講　　師　株式会社　東横イン　グローバル人材開発部　清末　隆文

１１：３０～１１：５０　協議説明

１１：５０～１３：００　昼食

１３：００～１６：５０　グループ協議

研究協議題「課題解決に向けた組織作りとその実践」

１７：００～１７：２０　講話

講演テーマ「持続可能な専門高校を目指して」

講　　師　元全国農業高等学校長協会理事長　花野　耕一

７月２２日（金）

９：００～１０：００　グループ協議

１０：００～１１：２５　指導講評

文部科学省　初等中等教育局　産業教育振興室　教科調査官

国立教育政策研究所　教育課程調査官　田畑淳一

１１：５０～１２：００　閉講式

開講式

主催者の全国農業高等学校長協会理事長の徳田安伸先生が、来賓の紹介をして始まった第４６回学校運営等研究協議会の開講式あいさつでは、「学校運営は当事者意識があるかどうかがカギになるため、教員は短期的および長期的な対策を立てて運営に当たらなければならない。」ことを指導していただいた。このためには、当事者として幅広い教員どうしのネットワークの構築と情報収集をすることが必要不可欠であり、この協議会をそのネットワークを作るための機会にし、今後の学校運営に活用していかなければならないと感じた。

続いて、来賓として参加された文部科学省初等中等教育局主任視学官の梶山正司様からは、「経営能力のある担い手育成のための実践教育現場で、実践教育を充実させる必要があるため、これを推進するための人材が集まる本協議会を有効活用してほしい。」と激励を受けた。

さらに、同じく来賓の東京都教育庁指導部主任指導主事の堀川勝史様からは、農業技術の発展に対して、担い手の不足や高齢者問題などが深刻化しており、東京都では専門教育に目的意識を持った人材の育成を推進していることが紹介された。東京都だけでなく全国的に産業界が、専門性をもとにして活躍できる人材の育成を期待しているとのことであった。我々はこの期待に応えて、より社会に貢献できる有用な人材の教育を実施すべきであり、そのための良い機会であるこの協議会で、私も多くを学び、今後の教育活動に還元していかなければならないと強く感じた。また堀川様は、この協議会でできるだけ多くの提言をしてほしいと、我々に期待の言葉をかけてくださった。

講演

講演テーマ　「これからの時代の人材育成」

講　　師　株式会社　東横イン　グローバル人材開発部　採用担当　清末　隆文

これからの人材育成、および学校経営と企業経営の相違点についての講演を聴講した。初めに清末様は教職人生を振り返り、教職が充実感や満足感が得られる仕事であること、地域社会から支援されている仕事であり、ゆとりは持てないが、愉しむことができる仕事と総括した。これまでの３８年間の経験で、特に思い入れのある新設校の開校についての思い出を話してくださった。新設校の開校に携わることは非常にまれなことであるため、我々にとっても非常に興味深い話であった。特に、学校開設のための全体的なデザインについては、学校の特色をいかすため、統合校のバランスを重視したというくだりでは、統合する高校のある地域や卒業生に対する配慮や気遣いが感じられ、事務的な作業では地域に受け入れられにくいことが示唆された。清末先生がはじめに話された、すべて次の校長に引き継がざるを得なかったことから、学校経営は一朝一夕には達成できず、学校経営は組織力の向上が不可欠であることが指摘された。この課題を解決するためには、学校経営のみならず、組織の運営に当たっては、達成すべき明確な目標がなくてはならないこと、その目標を見えるように掲示するなどして、組織の構成員に対して目標を周知させる必要があることが考えられた。学校は地域社会から支援されているということを大切に考えていることがよくわかる一節であると感じた。新たに統合開設された学校の運営に当たっては、職員全員が運営にかかわる必要があったが、どうしても職員の目標達成のための温度差が見られたり、目標を見失いがちになったりしたため、目標を職員室に掲示したり、さりげなく目につくところに掲げたりして、職員の意識向上を目指すなどの工夫をしたそうである。この辺のアイデアや工夫は、クラス運営にも共通することがあるとも思えたので、結局のところ職員も生徒もそう変わらないということ、また、目標達成のための経営戦略をどのように練るのかが大切であると感じた。考えてみれば、企業の経営も似たようなものがあり、毎朝会社の経営理念や目標を社員全員で唱えたり、事務室の一角に掲示してあったりなど、組織運営には企業も学校も大差なく、むしろ企業経営が数歩先んじている印象を受けた。もちろん、利潤を追求する企業と優秀な人材を育てて社会貢献に寄与する学校とは異なる部分もあるが、目標の見える化や組織一丸となっての目標達成などの基本的な部分は一致していると感じた。したがって我々が学校運営に当たる場合には、組織力の向上を目指して、生徒と社会のためになる学校運営を目指す必要がある。

今後は小さな組織形態の一員としてだけでなく、大きな社会の中での学校の位置づけ、その中での自分の役割と社会に対しての影響をよく考えて、行動すべきであると感じた。また、学校組織の中でも目標達成のための高い志と能力を持った職員の教育と育成も管理職の重要な役割であると感じるとともに、職員のモチベーションを高める工夫の仕方も管理職は持たなければならず、管理職は非常に難しい立場であるとともにやりがいのある職であると理解した。

グループ協議①

研究協議題目　「課題解決に向けた組織づくりとその実践」

～自然災害時における学校組織機能の力～

２０１１年3月１１日の東日本大震災、直近では熊本・大分を中心とする震災では、行内危機管理体制や学校内での安全意識が喚起させられる大きな災害となった。これを踏まえて、災害時における農業高校の「果たす役割」、「果たさなければならない役割」を考え、ある状況下での取るべき初期対応と管理職のリーダーシップについて、グループ内で討議して、その内容をポスターにまとめることが本研究協議の目的であった。

想定する学校の概要

①北日本の内陸部、寒冷地、人口１０万人の地方都市に所在する。

②学校規模は、農業科、畜産科、食品化学科、林業科、農業土木科の５学科１５クラス生徒数約６００名、(男女比６：４)、教職員数６５名、(管理職　校長、副校長１、教頭１、事務長)、施設設備は概ね整い、遠隔地対応の定員４０名の寮を有している。

③地域の伝統校であり、生徒は概ね落ち着いた学校生活を送っている。地域からも信頼されている学校である。また、教職員意識も高く、結束力もある。

④東日本大震災後、形式的であった「危機管理マニュアル」を実働的にすべく改定を進めていたが、具体的対応例を示すことは、かえってマニュアルを複雑化させるとの意見が多く、結果的には一部の改訂にとどまっている。

⑤そのような中、一部危機感を持つ職員からは、早急な抜本的見直しを求める意見も上がっていた。

想定する自然災害（地震）

①　２０ＸＸ年１１月１日（平日、通常授業日)、１６時、学校所在地を含む広範囲で、震度７強の地震を観測する。

②電気、ガス、水道のライフラインはすべてダウン、しかしながら、携帯電話のメール機能だけは、何とか通じている。

③校舎倒壊はないものの、周辺家屋の被害甚大で、多くの周辺住民が、避難先として広い校地内に集まりつつある。(指定避難場所ではない)

④校長は、県庁所在地（５０㎞遠隔地）へ出張中で不在、３０名程度の教職員は確認できるものの、その他、在校生徒数等の情報は不明である。

命　題

校長不在、教頭（副校長）がとるべき行動を、初動対応から自治体救援組織との連携ができるまでを３日間程度と想定し、具体的にまとめなさい。

農業高校の管理職として、特に危機管理対応組織の構築の視点を重視してください。

私たちの班はD班であり８名の教員で構成されていた。それぞれの勤務地は秋田県、栃木県、千葉県、静岡県、岐阜県、岡山県、福岡県、宮崎県と広い地域にわたっていた。そのため、１１月１日という日時に北日本ではどのような気候になっているかを共通理解した上で協議を開始した。また、学校規模、学科編成、寮の運営、それぞれの学校で作成している「危機管理マニュアル」等を参考にしながら、ある程度の条件設定を行い、危機対応策について話し合った。

まず、初動対応についてまとめ、次に避難所開設から避難所の運営についてまとめて職員や自治会との連携についても検討を行った。はじめに話し合った初動対応では、学校の被害箇所の確認と避難誘導経路の確保と校内に残っている避難場所への誘導、対策本部の設置、校内で避難している生徒の確認と下校した生徒の安否確認、生徒の避難状況を確認、校長や県教委への報告、これらをほぼ同時に実施する必要があることを話し合いでまとめた。場合によっては、農業高校の農産物や機材、生徒のマンパワーを非常用の食料や避難所の物品、ボランティアとして提供することがありうることも考えた。

次に避難所開設のための本部を組織して、避難所の運営を開始する。避難所の運営に先立ち、校内の避難者を受け入れる場所の確保を行った後に、被災者を受け入れ、情報の共有化、食料・物資の確保、怪我などで救護が必要な生徒と職員の保護、ボランティアの受け入れや自治会との連携を組織的に実施する。なお、生徒対応も並行して実施し、帰宅可能な生徒に対しては、保護者に学校まで迎えにきてもらい、担当教員が確認した後で帰宅させる。一方で、帰宅が困難な生徒に対しては、学校で保護する必要がある。救護の必要のある生徒は、寮を解放して休ませる。話し合いの中で、条件にある仮定の学校は指定避難所ではないため、支給されている水や食料の備蓄はないことが明らかになった。また、これまでの事例から、地震で避難所として利用した場合、仮説設備が整うまでの間のトイレの準備や利用について、迅速に対応する必要があり、ある事例ではグラウンドに一定間隔で穴を掘り、そこをトイレとして利用させたことが、後で避難所としての秩序を保たせたという説明も聞いた。地震の発生時間は１６時のため、日の入り時間は１７時を少し過ぎた時間となるため、水や食料、トイレ、発電機などを明るいうちに準備しておくことが重要であるという話し合いをした。さらに、１１月のはじめとはいえ、夜間は気温が低下することも予想できるため、ストーブの準備等、暖をとる方法を考えておく必要もある。

このようにして夜を過ごす準備をしながら生徒との連絡をとり、生徒や家族の安否確認を継続して、全員の動向を確認しながら、不在の校長や県教委とも連絡を密に取っておく必要がある。一方で、職員にも家族がいることから、夜間や次の日のシフトを考えながら、職員の精神安定も図る必要がある。最終的に３日目に自治体救援組織と連携がとれるまで、継続すると共に、現状の問題点をまとめて自治体に報告して引き継ぎをするという、結論に至った。

以上の協議の結果から、危機管理マニュアルの必要性を痛感すると共に、リスクマネジメントも考慮しておき、災害に対して常に考えて、心の準備をする大切さを感じた。

講話

講演テーマ「持続可能な専門高校を目指して」

講　　師　元全国農業高等学校長協会理事長　花野　耕一

元東京都立農芸高等学校校長の花野先生から、「持続可能な専門高校を目指して」という演題で講話をいただいた。資料は平成２７年の「産業と教育」１２月号掲載記事であった。

この中で、花野先生がこれまで学校の閉校や開校に携わってきて感じたことから、専門高校が継続して存続するために必要なアドバイスをいただいた。「学校が閉校するときに強く感じることは、地域には学校に対する強い思いがあることだ。」と花野先生は話した。いつも感じることではあるが、学校が閉校するときには、その存続を願う地域の声やOBからの声が大きくなるという。大曲農業高校でも新校舎が建設され、旧校舎が解体されるときには地域住民、OBが校舎見学に訪れた。これは、ただ単に校舎というハードに対する思い出や希望だけではなく、これまで地域と共存し、地域に貢献してきた大曲農業高校というソフトの真価の表れだったと感じた。一方で花野先生は、「学校が開校するときには、何もないところから新たな伝統や地域との絆を作らなければならず、とても大きなプレッシャーになる」と話した。そしてこの伝統や地域との絆は一朝一夕にはできず、人口減少とそれに伴う学校数の減少によって学校が長期存続できる保証もない。しかし、長期的な展望を持ち、戦略的にマネジメントすることで、持続可能な専門高校が維持できると花野先生は続けた。その条件とは、１）地域に不可欠な学校、２）保護者から選ばれる学校、３）自己改革ができる学校の３点である。

具体的な対策としては、①学校をブランド化し、保護者から選ばれる理由をつくることが必要で、学校に対する大人のファンをつくって維持するしくみを作ることである。大曲農業高校は学校のブランド化はしているが、保護者に選ばれているか、学校のファンを維持できているかを常に考えて、地域との絆をつくっていかなければならないと感じた。②課題研究を充実させて、地域課題を解決することで、地域のシンクタンク的役割を果たすことである。本校の課題研究地域の課題解決を目指しているかといわれると、疑問符がつく。もっと地域の課題に向き合い、積極的に課題解決に取り組むべきであると考えた。現在本校で実施している研究活動は視野の広いものが中心である。これを継続しながら、もっと地域に還元できる研究も実施していかなければならないと感じた。③ベンチマーキングを戦略的活用して自己改革を積極的に実施する。ベンチマーキングとは、他者の優良事例を学び、取り入れる手法であり、学校は常に他校や企業の良いところを自校の独自性の上に加えていく必要がある。④広報活動を徹底して、広く社会に自校のことを伝えていかなければならない。マスコミ、インターネットのみならず、あらゆる手段で積極的に事項をPRしなければならない。

以上のアドバイスから、本校に不足しているものが理解できる。この不足しているものを補って地域から必要とされる学校として、今後も本校の伝統を守っていきたいと感じた。

グループ協議（全体会）

前日に各グループで協議した内容について発表し、非常時に迅速に行うべき対応策やその基本事項について確認しあった。以下では、各班ごとの発表で、特筆すべき点についてのみ述べる。

A 班

A 班のある班員の所属校は、他校と同様指定避難場所ではないため、生徒や職員の非常用の水、食料も自治体から配布されてはいない。しかし、生徒の水と食料は確保されているという。入学時に非常備蓄用の水と食料を購入し、学校に保管して、卒業時に生徒に返還するとのことである。リスクマネジメントとして非常に優れた事例であると感じ、できれば本校でも実施できれば、保護者、職員ともに安心できると考えた。また、帰宅地別の避難訓練をしている学校もあるようで、これもまたリスクマネジメントとして優れた事例と感じた。

B 班

避難所の組織は、恒常的なものではなく、ポイントで見直して常に現状に最も適した組織編成を組み替える柔軟性が必要であると発表した。しかし、仮設事例に合った通り、危機管理マニュアルと同様に柔軟性を求めすぎると、細かな対策が抜けてしまう恐れもあるため、優先順位を明確にしたのちにしっかりしたマニュアルとわずかな自由度を設けるべきかもしれないと感じた。

C 班

出席簿や重要書類の持ち出しについて言及したのはここだけであった。しかし、書類の持ち出しについては後での対応でもよいのではないかと考えた。震災時の教訓として、「黒電話はつながるので、非常時に黒電話が使えるように準備しておくほうが良い」や「地下水が下がって水が出なくなったので、非常用の飲み水は準備すべきである」といったアドバイスがあった。活動は常に二人一組で行動し、単独行動はさせないといったアイデアが紹介された。これを可能にするには、ボランティアが必要と感じた。

D 班

私たちの班のため、７ページを参照していただきたい。

E、G 班

これまでの班とほぼ同様の発表であった。

F 班

災害時にどのように外部に連絡するのかという方法について述べられた。例に挙げられたのは、熊本での震災の時に机を校庭に並べて文字を作って外部に現状を伝える方法であった。

以上のことから、各校で自校の現状に合った危機管理マニュアルが必要であり、随時整備するとともに、生き残りの知恵集のようなものも必要かもしれないと考えさせられた。

指導講評

文部科学省　初等中等教育局　産業教育振興室　教科調査官
国立教育政策研究所　教育課程調査官　田畑淳一

田畑調査官からは、指導講評というよりも、今後我々がどのように仕事に向き合っていくべきなのか、その指針を与えられた。

自分が仕事に対してどのように向き合って、どのように生かすかを考えた場合、対象は３つ考えられる。まず生徒のため、次に地域のため、そして未来のためである。それぞれの対象に対して、自分自身に何ができて何をすべきかを考えるべきとの意見であった。これは、我々職員個人に対しての話だけではなく、学校に対してもいえるのではないかと考えた。学校は、生徒のため、地域のため、未来のために何をなすべきか、考えて経営していかなければならない。本校の場合、地域の主幹産業としての農業をテーマとして、生徒に対しては農産物としての生物を育て加工して販売するという学問とともに、農業を通して人の生き方、地域社会や地域住民とのかかわることでコミュニケーションの構築のしかたや、社会の一員としての個人の確立を目指させる。また、その先に農業の担い手という選択肢があるというストーリー性を持たせた人材育成を目指してもよいのかもしれないと考えた。

我々が学校勤務を効率的に実施するためには、組織を構造化したうえで、それぞれがそれぞれの仕事をする必要がある。したがって、適切に仕事配分をすることで、学校業務を円滑に遺漏なく実施することが不可欠である。特に学校運営には重要なことの１つであると感じた。

まとめ

私が７月２１・２２日の両日参加させていただいた研修には、全国の農業高校から副校長、教頭、農場長、教務主任をはじめとして、多くの学校の幹部職員が参加しており、２日間の研修を通して学校内外の事情や様子などを含めて話し合いをすることで交流、親睦を深めることができた。今後の教員生活では、今回の研修を糧にして精進することで、学校運営にあたって生徒やほかの教員が安心して活躍できる場を提供すべきであると感じた。特に、不測の事態が生じた際の危機管理の重要性と意味が十分に理解できた。しかしながら、不測の事態を回避するリスクマネジメントの必要性も痛感した。今回貴重な研修の場を提供していただいたことに深く感謝している。

第55回東北地区高等学校農業教育研究大会
第14回全国高等学校農場協会東北支部大会

農業科　　藤井　亨

日　時：平成２８年８月１７日１２時３０分～１８日１１時３０分
会　場：青森県八戸市　八戸プラザホテル
テーマ：「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と発展」
参加者：東北地区農業高等学校教員等１７８名
（校長　伊東金一、教頭　永井元、農場長　教諭　佐々木惇、
教諭　藤井亨、実習助手　黒田一久）

１．日　　程　第１日目（８月１７日）

12:30～13:10　開会式
挨拶　大会会長　農業高校長協会東北支部長　農場協会東北支部長
祝辞　青森県教育委員会教育長　全国高等学校農場協会長
13:10～14:10　農場協会総会
農業教育功労者表彰
議案第１号　平成27年度全国高等学校農場協会東北支部事業報告
議案第２号　平成27年度全国高等学校農場協会東北支部決算報告監査報告
議案第３号　平成28年度全国高等学校農場協会東北支部役員
議案第４号　平成28年度全国高等学校農場協会東北支部事業計画
議案第５号　平成28年度全国高等学校農場協会東北支部予算　以上承認
本部情勢報告　全国高等学校農場協会副会長　小堀紀明氏
１　農場協会の概要について
２　農場協会の活動内容について
３　農場協会全国大会について
14:30～17:00　研究協議・分科会（第４分科会参加）
大会テーマ「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と発展」
第４分科会（学校農場運営）テーマ
「生徒の実践的・創造的な態度・能力を育む農場運営はどうあるべきか」

第２日目（８月１８日）

9:00～10:30　講演会
演題「地方創生における教育の役割」
講師　青森公立大学　学長　香取薫氏
10:40～11:00　指導講評
講師　青森県教育庁学校教育課　指導主事　小笠原理高氏
11:00～11:30　閉会式
挨拶　大会会長　次期開催県（山形県）代表

２．協 議 内 容　（１）第４分科会協議内容
事例発表

①秋田県立金足農業高校　教諭　渡辺均

・「あぐり交流館」の活用

開設８年目で地域住民に浸透し地域拠点施設になった。

農産物販売会・農産物宅配便・野点会・防災訓練等実施。

年間農場訪問者数３，３００名。

・学校農場運営の課題

全ての部門が実習助手１人体制。繁忙期・担当者不在時は進まない。

副担当制を設けたが機能していない。

②宮城県加美農業高校　教諭　山田陽一

・ドローンに関する講習会実施

農業でのドローン活用に向けて、導入に向けた予算を計上。

③山形県立村山産業高校　教諭　後藤弥生

・学校設定科目「特産品開発」の設定

商品開発の手順や食品製造、モニタリングを実施。マラソン大会でのエイド提供として果樹の加工品を提供した。

質疑応答

・発表②について、ドローン活用の見込みは。（質問者：黒田一久）

→ドローンは、農薬散布や運搬よりもリモートセンシングへの活用が期待されているようだ。機体３０万円、センサー４０万円、バッテリー５万円×２個で合計８０万円あれば導入できる。農場予算に組み入れて導入する方向である。

・発表③について、学校設定科目「アグリサービス」における学校農場の活用状況は。（質問者：藤井亨）

→「グリーンライフ」と「生物活用」の良いとこ取り的な科目である。よって圃場や畜舎を活用している他、交流学習を重視している。

指導講評　宮城県教育庁指導主事　佐藤洋氏　会津農林校長　渡邉芳広氏

農業教育が果たすべき役割は、①産業としての農業を教える②農業が持つ多面的効果を教えるの２つであり、この２つを教えるのが農場である。地域連携活動が各学校・学科の教育課程に照らし合わせ、生徒にどのような力を付けるのか、評価に結びつけることが大切である。生徒を休日に出して、ただイベントをこなしているだけになっていないかという視点が必要である。

（２）全体会指導講評　青森県教育庁学校教育課　指導主事　小笠原理高氏

「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と発展」を主テーマに優れた事例について実践発表があった。

第１分科会→「農業と環境」は農業高校の導入科目であり、おもしろい・楽しみだ等３年間のモチベーションを持たせる科目である。これまでの学校生活でスポットの当たらなかった生徒に対し、得意分野を生かして展開させることが必要。例えば測定の得意な生徒・スケッチの得意な生徒・データをまとめ発表するのが得意な生徒がそれぞれいる。主体的に学ぶ力を育て、コミュニケーション力を高めるために何らかの形で発表させて欲しい。自己肯定感・自己有用感を高めること。

第２分科会→いかに興味・関心を持たせるか、教員の提案に対し、次の３つの事が重要。①その活動が楽しいか、②その活動がためになるか、③その活動が認められるかどうか、各校での取り組みは何のためにやるのか、生徒

に付けさせる力は何か検証を。

第３分科会→新指導要領では、新しい時代に何を学ぶか、どのように学ぶか、何ができるか、知っていることとできることをどう使うか、生涯にわたる社会性や資質能力の育成が重視される。それはプロジェクト学習で対応できる。生徒一人ひとりを伸ばすためのネタ探しを。

第４分科会→農場は実習で学んだ知識を深める他、交流により実践的に学ぶ場である。学科再編に伴う予算の見直しもあるが、学校農場が教育農場として機能しているか見直しを。ベテラン技術者が引退する中、技術力の維持向上のため産業教育研修等に積極的に参加をして欲しい。

農業クラブ活動について。大会で最優秀をとるためにやっていないが、最優秀をとると生徒が変わる。東北の先生方は私たちに（全国大会の）切符を譲ってくれなかった。しかし、相談やアドバイスは快くくれた。東北地区の学校は最大のライバルであり理解者がたくさんいる。休みがちの生徒が３年間皆勤で卒業したり、人前で発表が苦手な生徒が変容している。農業クラブはチャンスやドラマの宝庫である。自信と誇りを持てるような活動を普通高校や他の分野の高校全ての模範となることを期待する。

全体について２点意見を申し述べたい。①質問が少ない→疑問をぶつけられるチャンスである。積極的に質問して欲しい。②失敗例を発表する勇気を→必ずしも成功ばかりではない。失敗を発表することで他校がその失敗を通らずに活動できる。

３．感　　想　　数年ぶりに本大会に参加する機会を得た。今回事例を発表した各校とも何かしら先進的な取り組みがなされ、「地域貢献」「商品開発」等をキーワードに魅力ある取り組みが多く感心した。また、東北各県とも少子化による学校統合や学科改編を実施せざるを得ない状況であり、それを機に時代のニーズにあった農業教育を実践できるような環境作りに取り組まれていた。本校も学科改編を控える中、時代のニーズ・地域のニーズを明確に捉え、地域に貢献できるかが課題である。ＳＰＨ事業を機にして本校の活性化に取り組みたいと感じた。

平成２８年度　東北地区高等学校進路指導協議会研究大会　岩手大会

キャリア教育部　　藤井　亨

日　時：平成２８年１０月２８日１０時００分～１６時００分
会　場：岩手県盛岡市　サンセール盛岡
テーマ：「多様な社会変化の中で生き抜く力を育むキャリア教育の在り方」
参加者：東北地区高等学校進路指導担当教員等　１４０名

１．日　　程　10:00～10:30　開会行事
挨拶　東北地区高校進路指導協議会長（能代松陽高校長）千葉慎作
祝辞　岩手県教育委員会教育長　高橋嘉行
10:40～12:10　講演　演題「グローバル社会におけるキャリア形成」
講師　(株)学研アソシエ　学力開発事業部
小論文入試問題分析プロジェクトチーム
編集長　大堀精一
13:10～15:30　研究協議会　～第２分科会（就職指導）参加～
15:40～16:00　閉会行事
挨拶　次期開催県理事（福島商業高校長）喜多見薫

２．協 議 内 容　第２分科会（就職指導）協議内容
事例発表
⑴岩手県　葛巻高等学校進路指導主事　教諭　近藤孝
・連携型中高一貫校
進路講演会は中高合同で実施。中高連携進路指導部会を年２回実施。
・町との連携
葛巻町キャリア教育推進委員会を実施し、町内の小・中・高・町内事業所・町教委の代表が出席し、町のキャリア教育の方向性を確認。
・町からの支援
①補助金１０００万円
５５０万円は通学バス代で残りは予備校での講習費等。
②山村留学制度
全国各地から数名入学し、乳牛の後継者を育成。
③関東方面への職場開拓
町長・町議会議長も同行。
・進路状況
今年度の就職希望者は、１回目の試験で全員内定した。
・インターンシップ
就職希望者はあえて第２希望の事業所で実施し、担当する仕事が何の役に立つのか考えさせる。
⑵福島県　福島商業高等学校進路指導主事　教諭　瓜生文治
・「進路の手引」の改善
以前は３年生のみであったが、今年度より全校に１家庭２冊（生徒・

保護者）を配付。進路ノート機能を追加した。４月に配付した。

・「表現トレーニング」の取り組み
ベネッセ「表現トレーニング」を活用し、小論文対策をしながらコミュニケーション能力を育成。

・県「地域に貢献できる人づくりプロジェクト」制度の活用
学習習慣確立のための講演会､キャリア教育充実を図るための講演会、地域人材を活用した職業研究講話等実施。

(3)山形県　山形明正高等学校進路指導主事　教諭　佐藤和則

・私立高校としての特徴
工業科と普通科を擁し、学科に関係なくクラス編成している。
義務教育段階で不登校の生徒は各クラス１０名程度いる。

・模擬就職試験の実施
夏季休業中に５日間で実施。前半はセミナー、後半は学校独自の会社を立ち上げ、模擬学科作文試験や模擬面接試験を実施。

・進路体験発表会
２年生２月に実施。通常の進路体験発表会を行った後、発表後の先輩から生徒同士で模擬面接指導も実施。

質疑応答

発表(1)について

Q　１０００万円の補助金の使途と効果のあったものは何か。

A　５５０万円の通学バス代以外は、主に予備校での演習に使っている。町外に出て切磋琢磨することで受験の厳しさを感じることができる。

発表(2)について

Q　推薦会議が８月下旬とあり随分遅いようだが問題ないか。

A　お盆前まで時間をかけて、第３希望まで出してもらう。特に問題はない。

発表(3)について

Q　面接練習での効果的な質問にはどのようなものがあるか。

A　今の生徒は安易に答えを求めがちである。なぜこの会社を選んだのか、君はこの会社で何ができるのかを追求するようにしている。学校が就職を決めてくれるとは思わせないようにし、自分で決めさせるよう指導する。

指導助言　福島県立福島商業高校長　喜多見薫

入ってきた生徒に対してどういう３年間を過ごさせて次に進ませるかを考えさせられる発表であった。

発表(1)について　地域に密着した学校であり、町ぐるみで支えている。小さい学校でパワーがないと思われたが、きめ細かい進路指導がなされている。中高一貫校で、中学校の段階からキャリア教育を計画できる。町もかかわって一体となって生徒を育てていくことができる。インターンシップで、第１希望以外で実施しているのがよい。自分のやりたいことが明確になり、別の視点により発見もあると思う。自分の町にプライドを持ち、地域にとどまる地方創生の主戦力となる。地域の魅力を知らせることによって将来的には地元に帰ってくる生徒を育成する事ができる。

発表(2)について　１年次から計画的に話を聞かせ、見せてやらせること

で進学希望の生徒にも職業観、勤労観を育成できる。生徒自身が覚悟を持って思いを持って就職するかどうかが重要である。１か月で就職先を辞めるようでは内定率１００％も意味がない。

発表(3)について　学校の実態や先生方の熱意が伝わってきた。３年間で終わりではなくて卒業後までも含めた取り組みをされている。面接時間の工夫や学習タイムの工夫により生徒に意識を植え付けたい。３年間思ったようには育たないが、先生方が手をかけたことで何年後かに気づく時が来るだろう。

就職は、２０２０年東京オリンピック位まで上向きだが、その後は不透明と言われている。今いる生徒が２０～３０年後の働き盛りの世代になった時、時代に対応できるかが重要。経済産業省では３０年後の日本の産業について車の自動運転技術が確立され、自動運転の車の中で何をやるかというビジネスが始まると発表している。今就職した仕事をずっと続けられるのではなく、時代に応じて変わっていくという視点も必要である。

３．感　　想　次年度は、東北大会と県大会のいずれも本校が就職指導の発表を担当することが決定しており、視察を兼ねて参加してきた。今回就職指導の発表を担当した３校中２校がパワーポイントを活用した発表を行っており、配付資料も活用して、各校の進路指導主事が視覚的にも分かりやすく説明されていた。今回の発表は、町ぐるみの取り組みや各種機関との連携事業等、様々な取り組みがなされていた。本校ではＳＰＨ事業とキャリア教育活動との関わりについての発表が望ましいと思われる。これからの１年間で少しずつ発表の準備を進めていく必要があると感じた。

４．そ　の　他　次年度の開催について

平成２９年度　東北地区高等学校進路指導協議会研究大会　福島大会

平成２９年１０月１３日（金）　福島市福島駅前　グリーンパレス

１年部の取り組みについて

１年部主任　石垣ルリ子

１．生徒概要（H29.2.10 現在）

在籍	１Ａ	１Ｂ	１Ｃ	１Ｓ	１Ｈ	男女別計
男子	２０	２１	２１	２５	１	８８
女子	１４	１３	１４	９	３４	８４
計	３４	３４	３５	３４	３５	１７２
出身中内訳	大曲（３５）、大曲西（５）、大曲南（５）、平和（６）、西仙北（１３）、協和（７）、仙北（１７）、中仙（１２）、太田（８）、豊成（３）、南外（３）、美郷（２７）、角館（６）、生保内（４）、神代（５）、西明寺（３）、平鹿（１）、横手明峰（５）、秋田東（１）、御野場（１）、河辺（２）、湯沢北（１）、湯沢南（１）、東由利（１）					
部活動加入率	男子：９２．０%、女子：８５．７%、全体８８．９% ※ただし、これは４月当初の数値である。その後入退部の動きがあり、現在の加入率は若干下がっている。					

２．学年目標

志をもって未来への一歩を踏み出そう

１　基本的生活習慣を身につける。
（返事、挨拶、身だしなみを整える、提出物の期限厳守）

２　進路目標を定め、それを実現するための基礎学力の定着に努める。
（授業への意欲的な取り組み、資格取得）

３．学習と進路活動

（１）朝学習

８：３０から朝のＳＨＲまでの時間、「月：数学、火：国語、水：英語、木・金：コラム書き写し」を自学させた。数学は主に計算問題演習、国語は漢字練習、英語は英単語学習、コラムは魁新聞の北斗星を一語一句書き写すという形式で行った。基本的にプリント学習だが、国数英は教科担当が学年にすべて揃っていたこともあり、既製品を使用せず、その時々に必要な内容を担当が作成した。

【夏季講座の様子】

（２）夏季講座・冬季講座

夏季・冬季ともに、希望者を対象に進学対策と公務員対策をそれぞれ３日間程度実施した。

進学対策は夏季・冬季ともに国数英の３教科を１日１コマ（５０分）ずつ組んだ。夏季講座初日の１時間目には進学先についてのガイダンスを行った。冬季講座の最終日にはベネッセの実力診断テストを実施した。

公務員対策は、夏季は２コマ設定し、最初に学年部担当が公務員の仕事についてガイダンスを行った後、公務員試験問題演習を実施した。冬季は上野法律ビジネス専門学校から講師を招き、２年生と合同で冬季休業明けの土日に実施した。（外部講師を招く場合は有料。）

夏季講座を受けた生徒は概ね、冬季講座にも参加している。進学対策には約２０名、公務員対策には７名が参加した。なお、進学対策は大学・短大・看護医療系専門学校希望者のみを対象とした。

（３）長期休業明け課題テスト

ベネッセの基礎力診断テストを４月・８月・１月に実施した。付属の事前学習ワークを長期休業中の課題としていたが、それだけでは分量が不足であったため、各教科で課題を追加した。

（４）進路ガイダンス

２回計画し、１回目は１１月、２回目は２月に実施した。１回目は希望別に進学（大学・短大・林業大学校：５分野）・進学（短大・専門学校：６分野）・就職・公務員に分かれ、それぞれの分野についての概要を聞く形式をとった。そして２回目は、模擬講義と職業体験という形で企画した。

模擬講義では農学・経済学・栄養学・看護学の４分野に分かれ、２時間続きで大学や専門学校の講師による講義を受けた。職業体験では１６分野に分かれ、その分野の仕事内容を詳しく聞いたり、分野によっては実際に体験したりするものもあった。職業体験は公務員を除き、２つの分野を体験できるようにした。

いずれのガイダンスも業者（昭栄広報）の力を借り、５、６校時の授業をいただいて実施した。

【２月１４日 模擬講義・職業体験の様子】

（５）進路希望

右は４月当初に実施した進路希望調査だが、この調査の後にガイダンス等の進路行事を行ってきたので、希望を変更している生徒も少なくない。一つの分野にこだわらず、いくつかの分野を視野に入れて進路を考えるよう指導している。

生徒からは、進路について自分で調べ学習を行う時間が欲しいという声が上がっているので、次年度は調べ学習の時間を設けたい。

	進学							就職					進路未定
	国公立４大	私立４大	国公立短大	私立短大	看護医療専門学校	その他専門学校	未定	民間県内	民間県外	公務員県内	公務員県外	未定	
農業科学科	8	6	3	2	5	21	1	28	4	23	1	1	2
生物工学科	6	3	1	1	1	6	0	8	2	3	3	0	1
生活科学科	2	1	7	3	4	9	2	2	1	2	2	0	0
小計	16	10	11	6	10	36	3	38	7	28	6	1	3
合計	92							80					3

４．生活・生徒指導

（１）朝学習を８：３０から始められるよう、朝は８：２５分まで教室に入室・着席することを入学当初から生徒・保護者に呼びかけて理解を求めてきた。その甲斐あってか、遅刻する生徒は少なかった。ただ、学校生活に慣れるにつれ、一部の固定した生徒が遅刻するようになってきた。

（２）今年から携帯電話が校内で使用禁止になったことを受け、朝に巡回指導をした。時々注意を受ける生徒はいたが、概ね徹底されていたと思う。今後は巡回時間をずらすなどの工夫をしながら指導を続けていきたい。

（３）複数の生徒の金銭がなくなるということが立て続けに起こった。臨時学年集会を開いたりクラスで呼びかけたりしながら、他人の私物に勝手に触れない、空き教室に入らないことを指導した。

併せて、貴重品や私物の管理についても毎日ＳＨＲで注意を喚起した。ロッカースペースが死角

になっていることも問題と受け止め、バッグは教室内椅子の下に置くことにした。また、総合実習など長時間自教室を空けるような日は、学年部職員で巡回を行った。

（４）ＳＮＳ上や部活動内での人間関係に悩む生徒が多かった。特に、ラインやツイッター等で心ない書き込みをされたという相談が複数回あった。入学時にスマートフォンを買ってもらった生徒が多く、使用に慣れていない生徒がほとんどだったので、正しい使用について具体的に指導すべきだった。また、部活動では仲間との関係をうまく構築できず、しばらく保健室登校を続けた生徒も複数いた。日常生活を見ていても、言って（やって）もいいことと悪いことの判断ができない生徒が少なからずいるようであり、未だに小さなトラブルが起きている。そのような生徒には予防と対処療法をうまく使い分けながら、今後も指導にあたりたい。

（５）新校舎になってから、スペースの有効活用が校内のあちらこちらで課題となっている。１年部職員内でも、ロッカースペースのコートや実習防寒着を置くスペースが十分でないという声が上がっており、未だに解決していない。生徒には極力整頓して使用するよう呼びかけてはいるが、体育着袋などを床に置いているために清掃が徹底できず、床の埃が毎日気になっている。

５．最後に

（１）課題

私物の管理については、学校生活に慣れるのと比例して煩雑になってきている。ロッカースペースや教室は物を置くには十分ではなく、生徒には不便をかけているのも事実だが、環境の乱れが精神的な乱れにつながることを考えると、今後の生活において更に指導を強めていく必要がある。

インターネットやＳＮＳの使用については、その危険性について注意を喚起していきたい。特に他人に関する書き込みがいじめや不登校につながることから、集会や学年通信等を利用して呼びかけを継続していきたい。また、インターネット上に限らず休み時間等においても、心ない言動を他人に向ける場面を見かけることがある。幼さが感じられる生徒がまだまだいるので、そのような生徒に対しては個人面談や保護者との連絡を密にするなどしながら対応していきたい。

また、進路に関する意識付けとして行事をいくつか行ってきたが、個別に調べ学習をする時間が欲しいという声が生徒から上がっている。だが、ＬＨＲなどで全クラス一斉にインターネットや進路資料室を使うことは不可能なので、調べ学習をするための方法やコツを教え、一人でも調べられるようにしていきたいと考えている。

（２）１年間過ごしてみての感想

最初の学年集会では、「新校舎の１年生として入学してきたので、新たな大農の歴史を作るという気持ちで生活してほしい」と伝えた。１年を通じて様々なトラブルもあったが、生徒たちは概ね生き生きと生活を送っている。残念ながら途中で進路変更した生徒も数名いるが、皆勤を目指して生活している生徒も多く、この後の生活においても今の気持ちを忘れずに生活してほしいと願う。

【四月 学科集会】緊張しながら先輩に挨拶

【十二月 総合実習】販売する品をもって職員室へ

２年部の取り組みについて

２年部主任　　古瀬　利彦

１　学年の概況

在籍数は４月１７３名でスタートしたが、１１月末に１名退学し、年度末で１７２名（農業科学科３クラス（１０４名）、生物科学科１クラス（３３名）、生活科学科１クラス（３５名））となっている。また、進路希望は、平成２８年１２月時点で、大学・短大２５名、専門学校６２名、就職６６名、公務員１９名である。

２　学習・進路面

（１）朝学習の課題はベネッセのマナトレ（英数国）を使用。生徒は８：２５までに教室に入り、スマホを提出した後、課題に取り組む。朝学習や進路実現に向かって主体的に学習に取り組む体制を整えるため、担任が教室に張り付いて指導した。

（２）長期休業補習は夏季・冬季ともに、平日３日、英数国の３教科を実施。２年部には数学科職員がいないため、他学年職員の協力を得た。対象は大学・短大・看護医療系専門学校進学希望者とした。補習の時間は１，２年で揃えた。参加者数は、夏季１９名、冬季１２名だった。部活のために参加できない生徒が多かった。

（３）進学希望者向けの添削指導を６月から実施。英数国理をセットで受講することを条件とし、１５名が受けている。補習と同様、数学については他学年の協力を得ている。

（４）基礎力診断テストを長期休業後の課題テストとして４月、８月、１月に実施。付属のワークは分量が少ないため、各教科で課題を追加した。

（５）一般常識チェックテストを年３回計画した。生徒には一般常識ドリル（実務教育出版）を４月に配付し、チェックテストに向けて学習に取り組ませた。生徒への指示は、以下の３点である。

①ドリルの該当箇所を学習し、○付け・訂正をしてチェックテスト当日に提出する。

②チェックテストは英語・数学・国語・社会・一般常識の５教科から各１００点ずつ出題し、合計５００点満点のうち２００点未満は放課後に居残り課題に取り組む。

採点は学年部職員１５名で分担した。上位３０名～３５名程度を廊下に張り出した。また、３者面談資料に成績を掲載した。

（６）進路希望調査を４月に実施。２回目は１２月の進路ガイダンスに向けた進路希望調査を１０月に実施。１月に３者面談に向けての進路希望調査を実施し、今後、３者面談を通して確認した進路希望を３月末までにまとめる。それを担任間で共有し、来年度の進路指導に生かしていく予定である。

３　生活・生徒指導面

（１）スマホを使ったネットへの書き込みによるトラブルが数件あった。クラス内の生徒

同士によるものだけでなく、本校生徒と高卒の一般人とのトラブルもあった。相手にされたことに対する仕返しとして、自分もネット上に誹謗中傷を書き込むケースが多かった。生徒指導上の処分にならない案件でも、保護者にもトラブルの内容を伝え、保護者と一緒に生徒を指導したことで、書き込みという行為を辞めさせ、反省させることはできた。しかし、一度書き込みをしてしまった場合、人間関係が回復しない場合も多いと感じた。

（2）修学旅行前の班編成に関わるトラブルが数件あった。修学旅行前は、日頃から存在する人間関係の問題がより具体的な形で現れてくる。班編成の際は、生徒の行き過ぎた言動を制限したり、仲間はずれが出たりしないよう予防策を立てる必要があると感じた。

（3）新校舎に移り、主にロッカールームの陰で男女がべったりと寄り添う姿が多く見られるようになった。教師だけでなく、多くの生徒にとっても不快な光景であり、見る側とみられる側の意識のずれからクラス内のトラブルも起きていた。学年集会を開き、学校という場にふさわしくない行動であること、多くの生徒がいやな思いをしていることを学年全員がいる前で確認し、ロッカールームの奥で立ち止まって話している時点で廊下側に出てくるよう注意を与えることを伝えた。その後、生徒の目も見張り役となって働き、状況は改善したと考えている。

4　課題、次年度に向けて

（1）登校後と放課後にスマホを校内で使用し、注意されたときだけやめるという生徒が増えている。使用できる場所、時間、回収する場所、違反した場合の対応など、全校統一のルールとして、全職員で検討し、整備する必要があると感じている。

３年部の取り組みについて

３年部主任　髙橋寿宏

今年度の３年生は男子８５人、女子８０人の計１６５人となっております。運動部には９３人、文化・農業部には４５人が所属し、部活動加入率は８３.６％となっております。２年次の冬休みから２月にかけて３者面談を済ませており、担任全員がそのまま持ち上がることができたのでスムーズに３年生のスタートを切れたように感じられます。

４月１１日から早速進路目標を達成するため補習を開始しました。進学朝補習は火曜日に生物、水曜日に英語、木曜日に国語、金曜日に数学を８時から３０分間実施しました。生物だけは必要者の選択ですが、国数英の３教科はセットで実施しました。参加人数は予想以上の数で５０人ほどで取り組めました。週に１日ではありますが、教育課程上、英語と数学の授業がない生徒がほとんどなので忘れ防止につながり効果的だったと思います。また、毎週月曜日の放課後は国公立４年制大学を目指す生徒用に数学の補習も実施しました。ある程度レベルの高い生徒が少人数でセンター試験対策に取り組みました。センター試験の数学Ⅰ・Ａにおいて目標の４割まで得点は達しませんでしたが、それなりの力を付けさせることができたと思います。

夏休みになると朝と同じ４教科でも、少し人数をしぼって実施しました。夏休みの終わりの期間も実施できれば良かったのですが、残念ながら最初の期間しかできませんでした。この進学補習は９月いっぱい実施しました。

公務員補習は適性練習、数的推理、判断推理、理科、地歴・公民等、週によって計画を立てて月曜日から金曜日までの毎朝８時から３０分間実施しました。反省点は自学自習のテキスト学習になると欠席者が少しずつ出たことです。出張等でなかなか職員が揃わないことがありますが、次年度はなるべく講義形式で補習ができることをお薦めします。また上野法律ビジネス専門学校の協力を得て放課後補習や夏期講習も実施しました。進学補習と同様に学校独自の補習は夏休みの最初の期間しか実施できませんでした。

面接練習は株式会社マイナビの水本さんの講演を皮切りに開始されました。積極的に面接練習をお願いして努力する生徒もいれば、足が重くて担当職員にお願いに行けない生徒もいて個人差が大きかったです。頑張った生徒の中にはスタンプラリーを楽しむかのように全職員と面接練習をした生徒もいました。

小論文・作文対策は取り組みが遅くなってしまい、もっと早くからの対策が必要であったと思います。小論文・作文に関わらず、書くことの指導・練習は入学後すぐに取り組めば良かったと反省させられます。履歴書を書かせても誤字脱字だらけで、完成まで莫大な日数が必要な生徒が結構いました。３年生の朝学習で北斗星書き写しを実施しましたが遅すぎました。

四苦八苦の末、就職試験、入学試験が始まりました。就職は求人数が多かったこともあり、比較的順調に内定をいただきました。昨年度内定できなかった秋田おばこ農業協同組合に複数の内定を含む５７人の県内就職、就職進学１人を含む８人の県外就職。そして秋田県警、大曲仙北広域圏消防等の８人の公務員と就職希望者７７人全員が１月中に内定できました。

秋田県立大学等の１４人の４年制大学､男子が合格した聖園学園短期大学を含む１６人の短期大学、５８人の専門学校と進学希望者８８人全員が合格できました。

振り返ると、１年次におけるベネッセの診断テストで１つ上の先輩に相当差を付けられていたものが、２年生になる頃に同じか上の成績まで伸ばせたことが大きかったと考えます。あきらめず何事も早い段階でしっかりと身に付けさせなければならないと痛感させられました。特別優れたことがない学年でしたが、学年集会がチャイムと同時に開始できる学年であったことだけは優秀な学年でした。

全職員の御協力に感謝をし、この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

フラワーアレンジメントコンテスト

運営主任　照井　豊和

【秋田県学校農業クラブ連盟　フラワーアレンジメントコンテスト】　７月２２日（金）

来年度に行われる全国産業教育フェア秋田大会のフラワーアレンジメントコンテストは、本校が担当することになるため、県予選の位置づけである県連フラワーアレンジメントコンテストについても本校が担当することになった。もともと秋田県では実施されていなかった競技であるため、手探り状態での準備、運営ということで、実施に至るまで不安が続いた。しかし、協力してくださった栗林生花店の栗林さんや草花部門担当である平塚先生のおかげで、どうにか準備を進めることができ、大会当日を迎えることができた。

準備段階で最も不安だったのは、花材の選択および準備であった。こちらも栗林さんの全面的な協力により、設定したテーマの元、適切な花材を選んでくださり、事前公表の形で各出場校に連絡することができた。また予算が潤沢にあるわけでもなく、仕入れの段階でも市場価格より安く提供してくださり、どうにか予算内で実施することができた。さらに会場についても、新校舎となった本校での初めての開催であり、適切なスペースの確保、テーブルのサイズ、教室環境など、競技そのものについてもこれで良いのか不安がつきまとった。

こうした様々な不安な点を払拭しきれずに、大会当日を迎えたが、協力してくださった先生方、および積極的に行動してくれた運営生徒のおかげで大きなトラブルもなく、無事大会が進行した。

【準備が完了した競技会場】

【開会式の様子】

【審査長による競技説明】

【花材確認をする選手】

【オアシスの調整から始まる】

【真剣に取り組む選手たち】

【形作られてきたアレンジ】

【最後の仕上げ段階】

【表彰式にて受賞した本校生徒】

【閉会式にて挨拶する運営生徒】

【全国産業教育フェア秋田大会プレ大会　フラワーアレンジメントコンテスト】　１０月８日（土）

今年度は、県連フラワーアレンジメントコンテストの他、全国産業教育フェアのプレ大会としてのフラワーアレンジメントコンテストの運営も依頼されており、二度競技を実施する形となった。

こちらは、来年度の本大会に向け、地域の方に競技を知ってもらうことを目的に実施された。そのため、会場が秋田市のアトリオンであり、県大会の会場の雰囲気とはまるで違い、また、下見をしに行ったけれど、ほとんど当日勝負ということであったため、やはり不安を抱えながらの実施となった。

大会当日、会場が地下のホールであったが、一階の吹き抜けから競技の様子が見られるため、思いの外観覧者が多く、緊張感があったものの、目的である一般の方へのＰＲについては十分効果がある

と感じ、手応えを感じながらの運営となった。県大会では３年生が中心となった運営であったが、今回は来年度を見据えて２年生中心で運営を担当させた。それでも前回の運営で経験していることから、こちらからあまり指示しなくとも積極的に行動してくれたため、大会も成功裏に終えた。

全国産業教育フェアの大会を意識して実施したが、運営生徒数の不足、運営教員の不足、デモンストレーション会場が目立たない、予算をオーバーしてしまった、など多くの課題が見つかった。こうした課題に対して、今年度の全国大会石川大会での視察などで見聞したことを生かし、より良い大会を目指して、再度生徒とともに取り組んでいきたいと思う。

【開会式で選手宣誓する本校生徒】

【注目度の高い吹き抜けの会場】

☆運営生徒より☆　佐々木莉央

私たち大曲農業高校農業クラブ役員は、本校で行われたフラワーアレンジメントコンテストの運営に携わりました。この大会での上位２名が全国産業教育フェア石川大会（１１月開催）の秋田県代表として推薦されるという、重要な大会であることからとても緊張感をもって運営にあたりました。

張り詰めた雰囲気の中、選手たちは黙々と作品を作り上げていきました。私自身、フラワーアレンジメントを作製する様子を見たのは初めてでしたので、選手の表情や手先の動きに感銘を受けていました。また、完成した作品はどれも素晴らしく、選手の感性の素晴らしさも相まって感動させられました。農業クラブの競技ではなりませんが、１０月には秋田市のアトリオンにて、さんフェア秋田のプレ大会の運営にも携わりました。一般の方の観覧もあり、さらに緊張感をもった大会になりました。

これらフラワーアレンジメントコンテストの運営を通じて、競技に対する準備や心がけなど、たくさんのことを学びました。来年度は秋田県で全国産業教育フェアが行われます。その予選となる重要な大会を来年もまた本校が担当することになります。今年度の経験をもとにさらに良い大会になるよう頑張りたいと思います。

☆最優秀選手より☆　菅原彩夏（金足農業高等学校）

私は２年生になってから先生からフラワーアレンジメントをやってみないかと誘われるまで、華道もフラワーアレンジメントも全く経験がありませんでした。しかし初心者だからこそ自由に発揮できる感性があり、県連大会ではそれが評価されたのではないかと思います。講師の先生から「あなたの作品はダイナミックで堂々としている。それがあなたの良さである。」と教えていただきました。私はその言葉を信じて、大きな作品を作りました。

現在、金足農業高校では４人でフラアワーアレンジメントの活動をしています。指導・応援してくださる先生方に感謝を込めて、目標は大きく、来年度の「さんフェア秋田」での入賞を目指します。自分達の良さを十分生かし、アレンジを楽しめることができればきっと達成できます。金農ここにありと示せるよう、秋田の発展につながるよう努力します。

平成２８年度第６７回日本学校農業クラブ東北連盟大会意見発表会に参加して

農業科学科　伊藤　寿人

平成２８年８月２５日（木）～２６日（金）に岩手県花巻市「花巻文化会館」で開催された東北大会意見発表会には、各発表区分ごと各県大会で最優秀賞を受賞した県代表１名と開催県枠１名の７名が出場しました。。

発表区分は分類Ⅰ類（生産・流通・経営)、（１）農業生物の育成や生産物向上に関すること、（２）農業生産物の流通や消費に関すること、（３）農業経営や経済活動に関すること、分類Ⅱ（開発・保全・創造)、（１）生産物の加工技術や商品に関すること、（２）国土や地域環境の保全・創造に関すること、分類Ⅲ（ヒューマンサービス)、（１）動植物や地域資源の活用に関すること、（２）地域の食生活や伝統文化の継承に関することとなっております。

本校からは、５月２６日（木）校内意見発表会、６月３０日（木）～７月１日（木）秋田県学校農業クラブ連盟意見発表会で最優秀賞を受賞した２名の生徒が出場しました。

分類Ⅱ類出場者、生活科学科１年鈴木楓結さんの発表。

（写真１　鈴木楓結さんの発表の様子）

発表題目［和紙づくりが地域づくり］

①動機

少子高齢化が進む西明寺のために、今自分達に何ができるかを討論したところ、西明寺の伝統技術である「鎌足和紙」を通して、高齢者の方々の活躍の場をつくり、年齢を超えた交流が地域の活性化につながるのではないかと考えたからです。

②発表内容

この「鎌足和紙」を自分達の手で一から作り、和紙を利用して、大曲農業高校で製造している加工品と組み合わせ、地域の活性化を目指しています。

伝統ある和紙の製造技術に新たに西明寺地区の特産品である西明寺栗の殻を用いた和紙を完成させました。加工段階で大量に廃棄される栗の殻を利用することで地球に優しく、なおかつ、地域のＰＲ

にもなると考え実践してみました。
従来伝えられている技術に若い世代のアイデアを融合させ、地域の活性化につながる可能性を見いだしています。
自然にとても恵まれている地域ですが、近年隣の町では土砂崩れにより死者が出る災害にみまわれています。町は一面、水と土砂におおわれました。美しい景観もなくなりましたが、地域全体で復興に一生懸命取り組み以前の町を取り戻そうとしています。
和紙は地域の人々の心を和ませ、ふるさとを大切にするきっかけとなっています。
③今後の目標
自然と食や伝統文化をうまく組み合わせ、地域の大切な資源「鎌足和紙」の技術を進化させる活動を計画的に実践します。
クラブ員や地域の方々に「鎌足和紙」のすばらしさ、西明寺地区の活性化を普及し、生涯この地で頑張りたいと考えております。
④大会後の感想「地元への想いを胸に」
はじめに、校内意見発表会で順位をいただいた時、今までの練習の成果を発揮することができとても嬉しかったです。その後行われた意見発表秋田県大会では、東北大会出場を目標とし、日々の練習に真剣に取り組みました。私は、その時によって読むスピードにばらつきがあり規定時間である７分におさまる時もあれば、大幅にオーバーしてしまう時もあったため、スピードの調節に苦戦しました。
また、過去の大会のビデオを見てみると自分の表現力の未熟さと作文の内容のレベルの差を改めて感じさせられました。この時見つかった課題を改善する為、友達や先輩、先生方に協力していただき原稿を推敲し、よりよい発表を目指して努めた結果、最優秀賞を受賞することが出来たので良かったです。
そしてついに行われた東北大会では今までの練習と経験、そして文章に込められた私の地元である「西明寺」への想いを胸にステージに立ちました。結果は優秀賞…。全国大会に出場できなかったものの悔いはありません。
この意見発表会では、自分の意見を発表する事で想いを広めることが出来たということと共に、たくさんの事を学び、得ることが出来ました。この経験をこれからの行事や活動に役立てていきたいと思います。

分類Ⅲ類出場者、生活科学科２年髙橋冴恵さんの発表。

（写真２　髙橋冴恵さんの発表の様子）

発表題目［「方言の力」でふるさとを元気に］

①動機

離れて暮らしている私の祖父母は、秋田弁で話をします。しかし、祖父母が話す秋田弁の中には、私には理解できない言葉が多々あります。また、総合実習での地域の方々との交流では、秋田弁が多く聞かれました。実習での交流を通して、知らない人との会話でも、秋田弁で話すことによって親しみを感じやすくなることに気がつきました。

最近では、私と同様に方言をあまり理解できない若者が多くなっていると思われます。そこで、秋田の宝である秋田弁が、このままでは消滅してしまうのではないかと危機感を持ち始めました。秋田弁が失われても良いのだろうか、秋田弁を守るために私には何ができるのだろうかと考えました。

②発表内容

山や川などの地理的な条件や江戸時代の藩制度などのために人々の自由な交流が遮られ、それぞれの地域ごとに違った方言が生まれ、古くからその土地の身近な人々との交流に用いられてきました。方言は、風土や歴史、生活にも繋がっている、その地域の大切な文化だと思います。方言の魅力は、懐かしさ、親しみ、安らぎ、温かさ、仲間意識を感じさせることだと思います。近年、少子化や人口減少などの地域の問題がよく言われています。地域の絆を強くし、活性化し、元気にしていくために、方言の持つ力は計り知れないと思います。一方で、地域の外に向けても方言は大きな魅力を放つ力があると思います。「あんべ、いいな」という方言を使ったポスターなど、秋田の認知度を高め、イメージアップを図るためにも方言が使われてることに気がつきました。

方言は、内部では地域の人々に連帯感やその土地に生きる誇りや自信を持たせ、外部には土地の魅力をアピールできる、地域の大切な文化的資源です。この方言という大切な宝を自ら捨ててはならないし、私たちの世代で途絶えさせてはいけないと思います。

方言を守っていくためには、まず、方言の魅力にその土地に暮らしている人が気づくことが、なにより大切です。若者が方言の魅力に気づくための場や、子どもたちが方言に触れる機会をつくることで、方言が飛び交う活気ある地域づくりを実現していきたいです。

③今後の目標

生活科学科で学ぶ中で、保育園や福祉施設等での実習を経験します。お年寄りの方々との交流を通して、秋田弁をはじめとした様々な秋田の伝統を学びたいと思います。そして、学んだ秋田弁を紙芝居やかるたなどにして、地域の子どもたちに秋田弁の魅力を伝えていきたいです。このような活動を通して、自然と秋田弁が飛び交う元気な地域づくりをしたいと考えています。

④大会後の感想「遊びにおざってたんせ」

「遊びにおざってたんせ」。これは、私の意見発表の一文です。私は秋田弁に着目し、意見発表の題材にしました。このままでは秋田弁が無くなってしまうのではないか、伝統が途絶えてしまうのではないか、と危機感を持ったことから、秋田弁に着目しました。東北大会への道のりの中では、たくさんの試練がありました。原稿の手直しから始まり、読み方、表現力、原稿の暗記まで、どうしたら聞き手に伝わるか、どうしたら秋田弁の魅力をアピールできるのか、何度も何度も考えた日々でした。今、改めて考えてみると私一人の力では果たせなかったと実感しています。

東北大会は、二日間に渡り岩手県花巻市で行われました。東北大会は県大会とは比べものにならないほどレベルが高く、周りの雰囲気に私は圧倒されてしまいました。他県の発表者は言葉だけでなく表現も豊かで、私は聴き入ってしまいました。自分の発表が終わった時には、もっとできたのではないかという思いが強く、達成感よりも悔しさが残っていました。

しかし、この意見発表は私一人だけでなく、先生方やクラスの皆、家族の力があったからこそ、ここまで頑張ることができました。

この貴重な体験を通して、周囲にいる人たちの優しさ、周囲の人への感謝を改めて感じることができました。今回の大会は数ある大会の中の一つに過ぎませんが、多くのことを学び得ることができ、

出場できたことを嬉しく思います。東北大会出場に際して関わってくださった皆さんに感謝の気持ちを伝えたいと思います。本当にありがとうございました。今回の経験を糧に、そして悔しさをバネに、来年リベンジしたいと思います！

東北大会を振り返る

（写真３　前列左　鈴木楓結さん　前列右　髙橋冴恵さん　優秀賞受賞　）

校内大会後、秋田県大会、東北大会と２名の生徒を指導するに当たり、第６６回日本学校農業クラブ全国大会平成２７年度群馬大会報告書参考にさせていただきました。

意見発表会区分別審査講評

○区分「環境」

１　よかった点

（ア）すべての発表が各地域の環境保全活動やＮＰＯ活動に積極的に参加し、環境問題を自分のものとしてとらえており、生徒の熱意が伝わるよい発表だった。

（イ）森林・野生動物・野生植物・昆虫など、身近な素材から地域連携やボランティア活動等の輪を広げ地域とのつながりを深め、さらには地域活性化に目を向けるなど、環境問題に広い視野で考える姿勢は素晴らしいと思う。

２　改善すべき点

（ア）広く語る反面、具体性が乏しくなることがあり、注意が必要である。

（イ）区分の特性上、町おこしや地域連携に言及することが多が、農クの目標の一つである「科学性」にも留意し、町おこしや地域連携にも留意し、結果を数値で示すと説得力が増すと考える。

○区分「文化・生活」

１　よかった点

（ア）いずれの発表も、人や動物への愛情、地域への愛情のこもった、熱い思いを伝える素晴らしい発表であった。

（イ）思ったことや考えたことを行動に移し、意欲的の取り組んでいることが分かる発表が多かった。体験、実際の行動に基づいた発表は説得力がある。

（ウ）全国大会にふさわしく、練習を重ねたと思われる発表ばかりで、「発表のしかた」は大変レベルが高かった。

２　改善すべき点

（ア）自分の考えや思いを実現するための具体的方策を示してほしい発表が多々あった。

（イ）伝えようとしすぎるためか、抑揚をつけすぎたり、話す速度を変えすぎたりした発表があったが、かえって理解しにくかった。

以上の講評を参考にどのような指導で生徒を全国大会に導くかを考えました。まず、過去数年の全国大会意見発表会ＤＶＤを視聴させ、生徒のモチベーションを上げるようにしました。次に計画表を作成し、内容の精査、発表原稿の校正・推敲、発表練習と全国大会まで頑張る決意で臨みました。

発表原稿については国語科の先生方のご指導をいただき、県大会より数段よい内容となりました。学科や学年部など多くの方々の協力をいただきながら、発表練習を繰り返し、原稿暗記ができ、表現力がつき東北大会出場にできる内容となりました。

出場した二人の生徒は大会当日までは本当に良く努力をして頑張ってくれました。発表も立派で練習通り成果を出してくれました。結果は優秀賞ということで全国大会には出場することができませんでした。反省として、まだ１年生と２年生であり、体験や実際の行動に乏しいことがあげられます。また、発表につてはアナウンス講習会等で基礎をしっかり身に付ける必要があります。

次年度に向け、出場できなかった第６７回日本学校農業クラブ全国大会平成２８年度大坂大会報告書を参考にしています。

意見発表会区分別審査講評

○Ⅱ類「環境・保全・創造」

１　よかった点

（ア）発表者はしっかりと練習ができており、力強く自分の意見を話す姿勢が素晴らしかった。

（イ）学習した内容に結び付けて、環境問題をとらえることができている発表が多かった。

２　改善すべき点

（ア）自分の体験にもとづく内容が乏しい発表であった。

（イ）逆効果になる場合もあるので、必ずしも大げさな話し方でなくても良いと思う。

○Ⅲ類「ヒューマンサービス」

１　よかった点

（ア）発表者全員が生来の目標を設定し、その実現に向けて日々努力を重ねた実践が述べられている。

（イ）地域創生の観点に立ちしっかりと地域の関係機関と連携している発表が多かった。

（ウ）自らの実体験をを基にした考えを自らの言葉で述べている発表で説得力があった。

２　改善すべき点

（ア）農業クラブ員の発表として日頃の農業学習を基にした視点を大切にしてほしい。

（イ）全般的に発表内容の文字量がやや過剰であるため、早口の発表が多かった。

（ウ）個人活動なのかグループ活動なのか区別がつきにくい発表があった。

現在、２名の生徒は明日の農業を考えよう！セディア財団主催、第１回「高校生が描く明日の農業コンテスト」にチャレンジしています。このコンテストは、全国の農業高校に通う高校生から「わたしはこんな方法で農業を元気にする」をテーマに次の農業の担い手として、わたしたちが暮らす上で欠かすことのできない「農業」への学びを深めてもらうこと目的としています。幅広視野と多くの体験を積んで、来年度の全国大会（岡山大会）意見発表会出場を目指して頑張っていただきたいものです。

３２年の農業教員生活で専門的実践を振り返り

今年度農業クラブ活動で充実した指導ができたことに感謝しています。また、自分自身の活動を振り返る良い機会となりました。指導歴は以下の通りです。

平成３年　日本学校農業クラブ全国大会（新潟県）　プロジェクト発表（農経）優秀賞
平成６年　日本学校農業クラブ全国大会（香川県）　農業情報処理競技出場
平成７年　日本学校農業クラブ全国大会（栃木県）　農業情報処理競技出場
平成１０年　日本学校農業クラブ全国大会（北海道）　農業情報処理競技　優秀賞
平成１２年　日本学校農業クラブ全国大会（宮崎）　農業情報処理競技出場
日本学校農業クラブ指導者講習会（東京）
平成１３年　日本学校農業クラブ全国大会（千葉）　農業情報処理競技　優秀賞
日本学校農業クラブ東北大会（岩手）　プロジェクト発表（食料）優秀賞
平成１４年　日本学校農業クラブ全国大会（京都）　農業情報処理競技　優秀賞
日本学校農業クラブ東北連盟夏期研修会　事務局長
平成１５年　日本学校農業クラブ全国大会（秋田）　農業情報処理競技　実施主任
平成１９年　日本学校農業クラブ全国大会（広島）　農業鑑定競技（農業・園芸）優秀賞
平成２０年　日本学校農業クラブ東北連盟大会（秋田）　実施委員長
日本学校農業クラブ全国大会（北海道）　農業鑑定競技（農業・園芸）優秀賞
平成２０年～２４年　特別活動部主任
平成２３年　日本学校農業クラブ全国大会（長崎）　農業鑑定競技（農業・園芸・畜産・生活科学２）優秀賞
平成２８年　日本学校農業クラブ東北連盟大会意見発表会（Ⅱ類・Ⅲ類）優秀賞
日本学校農業クラブ全国大会（大阪）　農業鑑定競技（園芸）優秀賞

（写真４　農ク全国大会（大阪）　農業鑑定競技会出場者と　）

学校経営への参画意欲の向上や後輩教員の育成などを中心に、学校運営の推進者としての力量の向上を図ることが求められる立場となっている農業教員は、常に日本学校農業クラブ連盟の三大目標を意識した指導に努めていただきたいと思います。

三大目標

日本学校農業クラブ連盟では，自主的・主体的な活動を通して農業クラブ員の科学性・社会性・指導性を高めることを目標にしています。

【科学性】・・・私たちに科学性があるということは、物事や課題のおおもとにある決まりやいろいろな関係を、筋道をたてて合理的に考え、判断し、行動する態度を身に付けているということです。

【社会性】・・・私たちに社会性があるということは、自分と他人で構成する組織などの社会の出来事に関心を持ち、他人の意見や行動を尊重しながら、自分の考えを表現することができ、社会の一員として協力して行動する態度を身に付けているということです。

【指導性】・・・私たちに指導性があるということは、民主的、合理的に判断する力を身に付け、より良い方向へ組織やグループおよび自分自身をみちびき、目的を達成しようと行動する態度を身に付けているということです。

（写真５　農ク全国大会（大阪）大会式典会場で）

日本学校農業クラブ連盟は、農業を学ぶ高校生が、交流、研究、発表などの活動を通して、主体的に農業学習を進めるための組織として、昭和２５年に結成されました。以来６０余年、「科学性」「社会性」「指導性」を高めることを目標とし、活動を発展させ、次代の農業経営者の育成に留まらず、幅広く産業界で活躍する優れた人材の育成に、大きな貢献をして参りました。

一人ひとりが主役になれる活動をとおして、その体験や感動から社会の発展を図る人材に成長してもらいたいと思います。また、一人でも多くの生徒が日本学校農業クラブ全国大会に出場できるよう農業教員として日々精進努力したいものです。

第６５回日本学校農業クラブ
全国大会（大阪大会）に参加して

農業クラブ顧問　照井　豊和

【日本学校農業クラブ全国大会　大阪大会】　１０月２６日～２７日

今年度は、秋田県内の学校全てが農業クラブ東北連盟大会の発表部門で入賞できず、反省の多い年度になってしまった。そうした中で本校から全国大会には、農業鑑定競技のみの出場で、農業コースに進藤加鈴（３Ａ）、佐々木勇太（３Ｂ）、園芸コースに佐々木穂乃花（３Ｓ）、生活コースに草薙望来（３Ｈ）、佐藤希愛（３Ｈ）が選手として参加した。また、クラブ代表者会議に単位クラブ代表として大日向勇人（２Ａ）及び秋季代議員会に秋田県連会長である木元美禪（３Ｃ）の代理として、伊藤明良（３Ａ）が参加した。

《農業鑑定競技会》　大阪府立園芸高等学校（池田市）

本校からの出場生徒は、県連大会で３位以内に入賞した生徒を条件としていたが、園芸コースが不在となってしまうため、３位と大差のない位置にいた佐々木穂乃花を生物工学科主任推薦として参加させた。ただ、今回は、３年生のみの参加となってしまい、進路対策と同時進行での学習となり、競技に向けた対策になかなか集中できない状況であった。加えて、出場者の多くが農業クラブ役員であり、大会直前には大農祭まであり、大会に向かう環境としては、厳しいものがあった。このような中でも、農業科学科主任である伊藤寿人先生を中心に指導していただき、学習環境をととのえ、大会に向かう姿勢作りから取り組んでくれた。しかし、まだまだ力不足の状態で大会が目前に迫ってしまったため、選手たちもいささか焦りを覚え、大会前日のホテルでも最後の追い込みとして学習に一生懸命取り組んでいた。

結果としては、園芸コースで佐々木穂乃花が優秀賞を受賞できた。県連大会で入賞できなかった悔しさと、昨年度も全国大会に出場していた実績が、結果として表れたものと思われる。今年は、秋田県全体で見てもこの優秀賞が唯一の農業鑑定競技での優秀賞であったため、貴重なものとなった。

来年度は、全国大会未経験者だけが参加することになるため、早い段階からの指導と意識付けが必要と思われる。是非、来年度は、参加したコース全てで優秀賞以上を受賞し、強かった時代の大農を取り戻せるよう指導に取り組んでいきたい。御指導いただいた伊藤寿人先生および模擬鑑定用に実物等を提供してくださった先生方にこの場をお借りしお礼申し上げます。

【農業鑑定競技出場選手】

【競技終了後大阪市へ】

☆生徒の感想より☆　佐々木穂乃花

私は大阪で行われた農ク全国大会の農業鑑定競技に区分「園芸」で出場しました。昨年の群馬大会にも出場しましたが、昨年は秋田県大会で最優秀賞に入ることができたため出場できました。しかし、大阪大会へ向けて臨んだ秋田県大会では賞に入ることはできなかったため、私は今年の全国大会には出場できないと思っていました。

その後、先生から全国大会に出てみないかという話をいただいた時はとても嬉しかったです。全国大会に出場したいと思っていたため、私はすぐに「出たいです」と返事をしました。全国大会までは大農祭もあり、少し大変でしたが先生にわからないところを聞いたり、昨年使ったノートや資料を利用したりして勉強しました。昨年全国大会の生活部門に出場した先輩が優秀賞に入っていて、私も先輩のように賞に入りたいと思い、一生懸命勉強し、競技に臨みました。

農業鑑定競技の本番はあまり緊張することなく競技をすることができました。競技が終わって結果が出て優秀賞に入れたことを知ったときは本当に嬉しかったです。自分の勉強の成果が出たと感じました。御指導くださった先生方、本当にありがとうございました。

《クラブ員代表者会議》　大阪府立農芸高等学校（堺市）

クラブ員代表者会議とは、各単位クラブ（各農業高等学校）の代表が集まり、農業クラブの活性化に関するテーマのもと話し合う会議である。大日向勇人が参加した分科会は、「校内農業クラブ員が農業クラブを理解し、一丸となって活動を盛り上げていくためにはどのようにしたらよいか」というテーマで話し合った。この分科会では、青森県立三本木農業高等学校が事例発表し、その内容について質疑応答及び意見交換を行った。三本木農業高等学校では、クラブ員全体へのアンケート調査を行い、農ク活動の方向性や指針を決めるところから始めたようだ。そして、「三農魂」が生み出す、卒業生と在校生の帰属意識はやはり農業高校ならではの活動が源になっていること、クラブ員が手に取りたいと思う伝統ある機関誌「鍬人」を制作していること、各学科、部活動、地域、企業と連携した様々な事業の報告が印象に残っている。この分科会では、農ク役員がまず楽しむことが農ク活動の活性化につながること、農ク役員のリーダーシップが不可欠であること、全校生徒で取り組める楽しく連帯感を深められるアイデア、行事を増やすことが必要と結論づけられた。

参加した大日向は２年生ではあるが、意見を述べたり、積極的に他校の生徒とコミュニケーションを図る姿が見られ、学校を牽引する立場にあることを自覚させる機会となったようだ。大日向は、その後選挙に出馬し、現在本校農業クラブ会長になった。これら、話し合った内容について今後の本校での農業クラブ活動に還元され、今ある活動に工夫を加えたり、新たな取り組みに挑戦したりし、全校生徒が一体となるような活動が始まることを期待したい。

【積極的に発言する本校生徒】

【分科会集合写真】

☆生徒の感想より☆　大日向勇人

私が参加した会議には、全国から各農業高校の代表者が集まり、情報交換や意見交換をします。私は、学校の代表者として参加する緊張感と使命感、そして様々な人たちの意見に出会えることへの期待感を胸に大阪へと向かいました。

会議には多くのクラブ員が参加するため、三つの分科会をそれぞれ三班に分け、会議を行いました。私の参加した第二分科会二班は、最初にアイスブレイクとして自己紹介や名刺交換、簡単なゲームなどで交流を深めてから話し合いに入りました。議題は、「校内農業クラブ員が農業クラブを理解し、一丸となって活動を盛り上げていくためにはどのようにしたらよいか」で、新潟県立加茂農林高等学校の事例発表を聞き、話し合いが進められてきました。普段、関わることのない他県の高校の意見を聞くことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。この話し合いの中で「クラブ役員やイベントなどに参加している人には伝わっているが、それ以外の理解していない人が大半を占めている」というようなことを提示されましたが、このことは本校でも同じことが言えるのではないかと気づかされました。そして、パネルディスカッションで各校の行事や取り組みを出し合い、最終的に「全校が参加でき興味を持たせる行事を農業クラブ役員が率先して企画して行うことが必要」とまとめられました。

この会議で、本校の課題を見つけることができましたし、新しい企画を私たちで計画する必要性を感じました。会議に参加したことで、以前にも増して気を引き締めて取り組もうと意識するようになりました。

《秋季代議員会》　大阪府立国際会議場グランキューブ大阪（大阪市）

本校は今年度、秋田県学校農業クラブ連盟の事務局となっており、本校会長がそのまま秋田県連会長として、都道府県単位の会合に参加することになっていた。今年度の会長は木元美禪（３Ｃ）であり、東北連の会合及び春季代議員会にも参加し、様々な交流を進めてきた。しかし、最後の会合である秋季代議員会と、自身の受験が重なり参加することができなくなったため、代理として伊藤明良が秋季代議員会に参加することになった。

秋季代議員会では、日本学校農業クラブ連盟の各役員からの挨拶で始まり、事業や決算等ついての報告を中心に進められた。ただし、ここでは改めての質問は許されず、事前提出した質問に対する回答が報告されるだけであり、また、生徒による会議であるためか成人（顧問）の発言も認められないため、会議としては、あっさり終わった印象であった。

その後、大会式典（閉会行事）の旗手を務めるため、そのリハーサルに長い時間を要した。その成果もあり、大会式典当日は、旗手として堂々と入場し、代役ではあったが立派に務めてくれた。来年度も本校が事務局であるため、県連会長として、秋田県代表としてリードできる生徒に育てていきたいと考えている。

↑【代議員会の様子】

【県連旗入場の練習】→

☆生徒の感想より☆　伊藤明良

日本学校農業クラブ連盟全国大会における代議員会、及び大会式典に参加するため２５日に大阪へ向かいました。

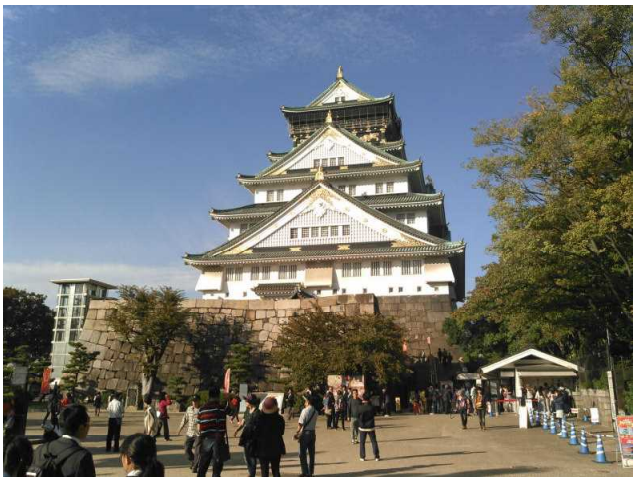
私は、県連会長ではありませんが、その代理として代議員会に出席しました。各議案の提案や会計決算報告などが行われ、それに対する質疑応答が行われました。スムーズかつ丁寧な運営で私も楽しんで参加することができました。資料とともにお土産品として関西限定のお菓子と農芸高校の生徒が手作りした赤米リースが配布されました。どれも初めて目にするものばかりで最高のお土産になりました。

二日目に行われた大会式典は､初日に大阪の各地で行われていた競技等の締めくくりとして行われ、緊張感がありながらも感動的なフィナーレでした。高山伸哉会長が言っていた「農業クラブとは、大変広い輪であり、強い絆を持つ組織である。」という言葉どおりたくさんの輪、たくさんの人のつながりができた二日間でした。

【大会式典の様子】

【大会式典後の記念撮影】

【大阪の特徴を出した大会弁当】



【大会後に大阪城見学】

インターハイ・国体を終えて

自転車競技部　　藤井　亨

インターハイ　～２０１６情熱疾走中国総体～

大　会　期　間：平成２８年７月２８日～８月２日
トラックレース：鳥取県倉吉市倉吉自転車競技場
ロードレース：広島県三原市県立中央森林公園

今年度のインターハイはトラックとロードが県をまたぐ形となり移動日を設定して行われた。

インターハイ予選となる東北高校選手権では、合宿の疲れが抜けないまま大会を迎えてしまい、辛うじてインターハイ出場権を得る形となった。そこでインターハイに向けては、合宿後の疲れが残らないよう細かく調整してインターハイを迎えた。インターハイ最初の種目であるチームスプリントは１分５秒台を目標としたが、トップスピードが上がらず残念な結果となり、チームに勢いがつかなかった。その後に行われた個人種目はチームスプリントの結果を引きずる形で厳しい戦いであった。

これまでにない厳しい練習に対して熱心に取り組んできたにもかかわらず入賞できずに終わってしまった。来年度のインターハイは今年度東北高校選手権の会場となった福島県で行われる。今回出場できなかった選手を含めて悔しさをバネにしっかり取り組んでもらい、今度こそは一人でも多くの選手が表彰台に上がって欲しい。

◇チームスプリント	12位	大曲農（後藤龍斗・田口優斗・高橋翼）記録 1分06秒689
◇スプリント予選	20位	後藤龍斗（３Ａ）記録 11秒450　＝落選
◇１kmタイムトライアル	11位	田口優斗（３Ａ）記録 1分08秒305
◇個人ロードレース（100km）	DNF	高橋翼（２Ｃ）

国民体育大会　～２０１６希望郷いわて国体～

大　会　期　間：平成２８年１０月５日～９日
トラックレース：岩手県紫波町紫波自転車競技場
ロードレース：岩手県紫波町特設自転車ロードコース

今年度の国体はほぼホームともいえる岩手県で行われ、本校から少年選手として５名中４名が選出され出場した。

団体種目では、チームスプリントに後藤・田口が出場。大学生との混走であったが、大学生を上回るほどの走りであった。１分５秒０前後を狙っていたが達成はならなかった。

個人種目には３名出場した。入賞の期待がかかったが、不運な面もあり、厳しい戦いに終わった。

秋田県チームとしても三年連続入賞無しに終わってしまった。現１・２年生の中には、全国で十分通用すると思われる選手もおり、今後の練習次第では上位入賞も可能である。強化拠点校として指定され多大なる支援を受けて来年度が最終年度となる。強化拠点校の目標とする全国ベスト４以上に向けて、更なる強化に努めたい。

◇男子チームスプリント	17位	秋田県（後藤龍斗・田口優斗・成年）記録 1分05秒882
◇少年スプリント予選	19位	伊藤　俊（２Ａ）　記録 11秒651　＝落選
◇少年１kmタイムトライアル	13位	田口優斗（３Ａ）　記録 1分08秒755
◇少年ケイリン１回戦	２位	後藤龍斗（３Ａ）
同２回戦	６位	後藤龍斗（３Ａ）　＝落選
◇少年ポイントレース予選	19位	高橋　翼（２Ｃ）　記録 0点　＝落選
◇少年個人ロードレース（94.8km）	49位	高橋　翼（２Ｃ）　記録 2時間47分34秒8
	DNF	後藤龍斗（３Ａ）

全国の壁

柔道部　石戸　将太

大 会 名：平成２８年度全国高等学校総合体育大会（中国総体）
　　第６５回全国高等学校柔道大会
大会期間：平成２８年７月３０日（土）～８月３日（水）
大会会場：島根県出雲市　島根県立浜山体育館（カミアリーナ）
出 場 者：３年Ｂ組　斎藤　聖矢

今年度インターハイには男子個人で出場することができた。個人ではあるが、３年連続のインターハイ出場を果たすことができ、経験上、現地入りしてからのスケジュールの組み方等、少しは大会の参加の仕方がわかってきた。しかし、肝心なのはいかに生徒を仕上げていくかである。毎年のことであるが、県予選を勝ち抜いてインターハイに出場することを最大の目標にしている生徒達であり、さらに全国で上位を狙うという実力は正直ない。何回か全国大会を経験して、次は全国でも通用するよう生徒を鍛え上げようと強く感じてはいるが、そこはなかなか監督としての力量を上げることができずにいる。ただ、出るからには大会までの期間、最善を尽くし、全国に太刀打ちできる武器を何か持たせて試合に臨みたいと考え、練習を積んでいった。

今回出場した斎藤は、身長168㎝、男子の最重量級としては短軀で、大型選手と対戦すると不利なことが多い。そのマイナス要素を、持ち前の腰の強さと馬力でカバーし県大会は勝ち抜くことができた。全県総体後、東北大会・全国ジュニア東北予選会と、２大会上位大会に出場したが、いずれも各県１位選手には敗退しインターハイでも苦戦が予想された。この経験から、とにかく組み手も技出しも早くし、先に攻めることで体格の不利がでないようにすること、そして相手が不十分なところから仕掛けてきたら得意の支釣込足や裏投で取りにいくというパターンを徹底することにした。返し技が得意なタイプだったこともあり、なかなか先に攻めるという試合ができずにきたが、全国ではこれしかないということで、本人も今まで以上に意識を高くして取り組むことができた。

インターハイの組み合わせはシードとなり、２回戦からの出場であったが、地元期待の島根・開星高校の選手の勝ち上がりが濃厚であった。開星高校は全国大会常連校であり、地元インターハイに向けて強化が順調で前評判の高いチームである。さらに、対戦が予想される選手は、そのエースで、春の全国高校選手権では個人でベスト８入りを果たしている有力選手であった。全国での対戦相手としては申し分ないが、攻略はさらに難しい相手との対戦となった。幸いなことに、団体戦にも出場している選手であったため、現地入りしてから、何試合もスカウティングすることができた。攻守ともにバランスが良く、寝技もそつなくこなし、隙が見あたらなかったが、イメージはつかんで試合に臨むことができた。

試合本番、予想通りの勝ち上がりとなり対戦を迎えた。プラン通りにこちらから攻めてはいったが組み手を制せられていて、相手を脅かすほどには至らなかった。そうしているうちに、こちらが雑に攻めてしまい返し技で有効を先行され、その後も果敢に攻めたが相手の受けは盤石で、最後は抑え込まれての一本負けであった。結果的には実力差を感じた試合ではあるが、本人は強豪相手に強気で向かっていったし、自分の攻めも出しての敗退なので納得のいく内容であった。

今回も全国大会の壁は厚かった。しかし、本校の次の世代には中学時代、全国出場経験のある生徒もおり、今後も全国出場は期待できる。全国で勝ち抜くことをモチベーションとして、まずは、今まで以上に地力を高める練習をすること、その中で、どんな選手と対戦しても一発勝負できる武器を身につけるよう一人ひとりのスタイルを作り上げることを今後の課題としていきたい。

本州最南端を目指して（Ｈ２８インターハイ）

女子ハンドボール部　　山本　力

期日：平成２８年８月１日～７日
場所：キリンビバレッジ周南総合スポーツセンター

今年度の全国高校総体は山口県を会場とする試合になった。試合も勝負であるが、山口までの移動手段がもう一つの勝負と頭を悩ませた問題であった。ボールや荷物もたくさんあり、結局レンタカーでの移動を選択した。

数日かけて徐々に移動する計画を立て、初日は福島県まで行き、郡山女子大学附属高等学校にお世話になった。東北のトップチームと質の高い練習試合が展開できた。その後三重県に移動し、四日市商業高等学校にお世話になり、全国トップレベルのチームと練習を行った。さらには岡山県で前年度インターハイ３位の玉野光南高校にお願いし練習させていただいた。選手は毎度のごとく当たり前のように私の遠征についてくるだけだが、日本縦断で山口まで向かう間、このように相手をしてくれる学校があることに感謝することが大切であると感じた。

８月１日にようやく山口県の会場にたどり着いた。とにかく暑い印象であったが、宿舎が結構新しくて居心地が良かったのが幸いだった。今回のインターハイは初戦シードで２回戦からの試合となった。広島山陽学園山陽高等学校と昨年対戦して敗れた大分高等学校の勝者と対戦することになった。試合を観戦し、相手チームの分析をしたが何分初戦ということもあり、手前びいきな考え方で勝てる気がしていた。試合の結果は大分高校が勝ち、結局昨年度と同じカードの対戦が決まった。翌日の試合本番では、アップ会場が外ということもあり、体力の消耗などを考え短めに行った。試合が始まると、あっという間に点差を開けられ開始間もない時間でタイムアウトを取る羽目になった。走るハンドボールこそ大農らしさであるにもかかわらず、全然走れないこと、そして相手チームに向かっていかないことを注意し、負けたら最後であることを確認させコートに戻した。若干の修正は出来たが、流れを引き寄せることが出来ないまま試合は終了となった。昨年同様九州の壁にかなわなかった。

全国の舞台でもう少し大農らしさを発揮させたかったが、逆に全国の高い壁を思い知る結果となった。しかし、これまでに経験した出来事は必ず確かな成果として現れてくることを信じて努力したい。過去の栄光は捨てて、新たな気持ちで全国大会に出られるよう選手と一丸になって進んでいきたいと思った。

中国総体を終えて

相撲部　小林　和成

相撲競技は鳥取県民体育館を会場に開催され、個人戦に久米、庄司が出場、団体戦は先鋒髙橋哲平、二陣鶴谷佳樹、中堅庄司光希、副将井畑良基、大将久米伊織の布陣で挑み、それぞれに持ち味を出してくれた。

予選１回戦、中部農林（沖縄）と対戦、次々年度開催県の沖縄第２代表。今年度九州大会準優勝校で本校より大型選手が揃っている。先鋒戦を落とすも、その後持ち直し４－１で勝利、なかでも副将１年井畑は積極的に攻め、嬉しいＩＨ初勝利を挙げた。

２回戦は野村（愛媛）は３月の全国選抜団体準優勝校。一昨年のＩＨ、３月の全国選抜でも対戦して惜敗が続いており今回こその意気込みで二陣、中堅を制し勝負は大将の久米に、もつれたが果敢な攻めを何度も残され逆転の突き落としに敗れ、またも２－３と惜敗。

３回戦は北部農林（沖縄)、沖縄第１代表。昨年のＩＨで対戦し本校が５－０で完勝していた私の過信から２－３と敗れてしまったが、１勝８点で優秀３２校となり、決勝Ｔ進出。

決勝Ｔ１回戦は富山商業（富山）で開幕試合であった。この大会勝ち星が無かった先鋒髙橋が立ち合いから得意の右上手を引き、一気の寄り倒しで完全に流れを掴み、二陣、中堅と連取し４－１でベスト１６となる２回戦へ進んだ。

２回戦の平舘（岩手）は、同じ東北ブロックであることからお互い手の内はわかっている中での対戦、先鋒髙橋が敗れ、二陣鶴谷の相手は苦手とする技巧派の選手だったが火の出るような激しいぶちかましからの引き落としでタイに持ち込んだ。中堅は両校大黒柱の対戦、庄司が攻め込まれたものの土俵際で体を開き逆転の上手投げ、審判の軍配は本校に上がったものの相手チームの主張に根負けした副審から手が上がり協議の結果取り直しとなり、無念の敗戦、副将井畑は実力差のある相手に必死の攻めを見せたが最後は下手投げに敗れた。勝負の決まった大将戦は久米が一気に攻め込んだところを最後にかわされ１－４の結果で入賞を逃した。

残念、無念の思いもあるが何より勝るのはこのチームで完全燃焼出来たことで、選手には感謝しかない。現３年生が入学した３年前に相撲部はやっと団体戦で大会に臨めるようになり、１６年ぶりに県総体優勝し今年度創部以来の悲願であった三連覇を果たすことができた。これに加え春季大会も三連覇、県民体育大会、新人戦を二連覇と県内敵なしの３年間を築き、東北選抜団体優勝、東北選手権団体準優勝と活躍は県内に留まらず、全国的にも秋田県代表は大曲農業と根付かせてくれた。私自身も選手たちとの関わりから大きく成長できた。

相撲部は慢性的な部員不足に悩んでいるのが現状である。数ある競技から相撲を選んでくれた今までの選手へ改めて感謝し、これからの選手により良い指導が出来るよう常に自己研鑽に励んでいこうと強く考える。

インターハイ・国体を終えて

なぎなた部　　古瀬利彦

２０１６ 情熱疾走 中国総体
大会期間：平成２８年８月５日～７日
大会会場：山口県立下関武道館
出 場 者：個人　鈴木まい（３年）

２０１６ 希望郷 いわて国体（第７１回国民体育大会）
大会期間：平成２８年１０月２日～４日
大会会場：一戸町体育館
出 場 者：団体・演技　３年　小澤柚羽香（３年）、団体　鈴木まい（３年）

新人戦で団体・個人ともに優勝、１月の東北選抜で団体優勝、３月の全国選抜で団体準優勝という成績を残していたが、全県総体では団体・個人ともに大曲高校に負けてしまい、個人２位の鈴木のみが辛うじてインターハイの切符を取った。全国選抜以来、県内の多くのメディアで取り上げられたことが大きなプレッシャーとなっていた一方、対戦相手にとっては奮起材料になっていたはず。プレッシャーを払い除けることを意識することで、なお浮き足立ってしまったようだ。

その後の県民体育大会で、鈴木が個人１位、小澤が２位となり、２名が国体選手に選考された。その後、東北選手権で小澤が個人１位、鈴木が２位となり、全県総体の悔しさを晴らす活躍を見せた。

インターハイに向けて意欲的に練習していた鈴木であったが、７月の大分遠征中に相手が倒れてきたことで足の指を骨折した。完治はしていないが痛みが取れた後、１週間ほど防具を着けた練習をしてインターハイに臨んだ。予選リーグ１試合目は愛媛県今治東の八木に判定で勝ち、２試合目は和歌山県星林の飯島に延長でメンを取り、予選を抜けた。決勝トーナメントでは、１回戦で千葉県千葉女子の齋藤に判定で勝ったが、２回戦で京都府南陽の中熊に判定で負けた。結果はベスト１６で、５位入賞まであと１勝だった。足の骨折を考えると、大健闘したと言える。

国体は、先鋒佐藤（大曲高校）、次鋒小澤、大将鈴木で臨んだ。１回戦山形、２回戦佐賀、３回戦愛媛とすべて３－０で勝ち、初日でベスト４に残った。秋田県チームは判定勝ちもあったが、他のどのチームより１本勝ちや２本勝ちが多く、会場で観客の目を引いた。来年度の国体開催県である愛媛県応援団の人が、「何で秋田は強いの？」と話していた。２日目、準決勝で神奈川県に２－１で勝ったが、決勝ではインターハイ個人優勝の春山を擁する熊本に２－１で惜敗し、結果は準優勝だった。１人ひとりがチームに素晴らしい貢献をしたが、特に中堅小澤は、熊本県チームにも１勝を挙げ、国体のすべての試合で勝ちを収めた。県連盟の祝賀会でも、国体に個人戦があったら小澤が優勝していたであろうというコメントがあった。すばらしい成績を収めた小澤と鈴木、一緒に頑張ってきた他の３年生４名に拍手を送りたい。

国体での小澤（奥）

国体での鈴木（奥）

第４０回全国高等学校総合文化祭広島大会（2016 ひろしま総文）写真部門を終えて

写真部　　古戸　毅

大 会 日 程　　会 場：７月３０日、８月１日は広島国際会議場

７月３０日　１０：３０～１１：００　開会式
１１：００～１３：００　講演会　講師：大阪芸術大学教授　織作　峰子
１４：００～１６：００　生徒交流会　顧問会議：パネルディスカッション

７月３１日　９：００～１５：３０　バス移動　撮影会：呉潜水艦基地ほか
１５：００～１６：３０　バス移動　作品データ提出・入力（広島国泰寺高校）

８月　１日　９：３０～１０：４０　表彰式・講評会（全国展示作品）
１０：５０～１１：３０　講評会（ひろしま総文撮影会）
１１：３０～１２：００　閉会式

全国写真展示　７月３０日～８月３日　広島国際会議場　大会議室

昨年度、第３５回秋田県高等学校写真連盟展において農業科学科３年Ｂ組の本間幹博君の作品、「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」が厳正なる審査の結果、特賞は逃したものの推奨一席となり、本年度７月３０日から８月１日まで広島市を主会場に開催された全国高等学校総合文化祭写真部門において各都道府県の代表作品と共に本人の作品が会場に展示され、好評を博した。（写真⑨）

７月３０日の作品展示や開会・閉会行事、講演会、生徒交流会などは広島市の国際会議場で（写真①･⑤）、３１日の撮影会は宮島、呉、尾道の３コースに分かれて実施された。残念ながら本人の展示作品「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ」と撮影会（本人は呉コースを選択）で撮った作品は入賞とならなかったが（写真④）、写真を通して青春を謳歌する全国の高校生と被写体や撮影技法など歓談のひとときを過ごし、交流を深められたようである。本人も写真を志す仲間と共に広島平和記念公園や同資料館での見学を通して戦争の悲惨さや原爆の恐ろしさを感じ、戦争という過ちを二度と繰り返してはいけないことを思い知らされたと語っている。

展示作品（広島県内企画展を含む３４７作品）は撮影者の発想力やセンス、撮影技術、高尚な哲学さえ感じられ、どれも見応えのあるものばかりであった。今年の特徴として水が織り成す豊かな情景や水面に映る一瞬の世界を捉えたものなど異次元的で清涼感溢れる作品が多いように感じられた。撮影会作品は"名所をちらつかせた"ものでなく、むしろそれを"隠す"ことでその土地の情緒を表現するという逆転的な発想力に長けた生徒の作品が最優秀賞に輝いた。本間君も展示作品のレベルの高さを実感し、自身大変勉強になったようである。漫然と写真を撮るだけではなく、ストーリーを考えながら撮影することの大切さなど撮影方法を多面的に学ぶことができたということであろう。迫力のある写真であっても入賞には及ばなかったり、逆に笑える面白い作品が賞を得ていることから、次は面白みのある写真も撮りたいと話してくれた。（写真⑥･⑦）呉港の撮影会では、海上自衛隊の護衛艦や潜水艦などをチャーター船に乗り、間近で見学し、迫力のある写真を撮ることができ、大和ミュージ

アムでは特攻作戦で亡くなった方々の遺品や遺言状、出撃前に録音した遺言などが展示されており、思わず泣きそうになったようである。自身の展示作品と撮影会作品は入賞こそ叶わなかったが、ひろしま総文を通して学んだ貴重な体験を今後の人生に活かしていければと話している。(写真③･⑧)

講演会において、「他の人が休んでいる時、遊んでいる時にこそ自分が成長できるチャンスがあるのです。その時に人の何倍も、何倍も努力すれば写真に限らず必ずその道のプロフェッショナルになることができるのです。大学や専門学校などで写真を学び、現場で即戦力となるような人とは違う、写真の"ずぶの素人"だった私がそうですから。」という国内外の第一線で活躍中の女性フォトグラファーであり大阪芸術大学写真学科長である織作峰子教授の高校生への熱いメッセージが今も深く自身の心に残る。来年度も参加者が感銘を受ける内容の講演をお願いしたい。(写真②)

顧問会議では高校時代に写真部員として総文際・全国展に参加・出品を果たし、現在、写真・報道関係で活躍中の若手男女プロカメラマン５名をパネラーに高校時代の活動や受けたかった指導、やっておけばよかったことなどを熱く語ってもらった。驚いたことに彼らの殆どが、かつて全国展で最優秀賞や優秀賞を得ており、その実績を引っ提げる形で名門の日本大学芸術学部写真学科や大阪芸術大学写真学科、多くのプロを輩出する写真専門学校などに"特別枠"の推薦入試で進学しているということである。高校時代の活動が上級学校への入学や現在の職業に直接結びついているのである。早くから目標を定め、達成するためのたゆまぬ努力により"夢"が叶えられることの現れと感じている。

① 開　会　行　事

② 講　演　会

③ 撮　影　会（呉港）

④ 授 賞 の 模 様

⑤ 閉　会　式

⑥ 全国展最優秀賞(Ⅰ)

⑦ 全国展最優秀賞(Ⅱ)

⑧ 撮影会最優秀賞

⑨ Happy　Birthday(本間君)

今年度の研究集録が完成いたしました。年度末のお忙しい中、たくさんの先生方に寄稿頂きましたことを感謝申し上げます。皆様の今後の教育活動にご活用いただければ幸いです。

研修部